

国士舘大学 地理学報告

1996年 No. 5 年刊

目 次

宮崎駿『風の谷のナウシカ』にみる

「自然-人間」観と現代人の地球環境観について 内 田 順 文 1

焼岳足洗谷における堆積土石の分布とその移動過程 長 尾 竜太郎 17

民俗事象への多面的アプローチの試み

—東京都武蔵村山市・岸の粉食を例に— 茂 木 真佐美 27

1995年度 国士舘大学地理学専攻 卒業論文主題一覧 37

宮崎駿『風の谷のナウシカ』にみる

「自然－人間」観と現代人の地球環境観について

内 田 順 文

1. はじめに

最近の地理学において、文学作品をテキストとして、その作品世界をフィールドとする研究が、いくつか見られるようになってきている(福田, 1991; 杉浦, 1992; 杉浦編, 1995、など)。また、近年の人文地理学会の大会をみても、文学作品を扱った研究発表は確実に増えてきており、この種の研究が、地理学の一つの分野となりうると認められたとまでは言えないまでも、その存在が認知されてきたという程度にはあるようだ。

この種の研究については、福田(1991)が詳しく展望しているが、私もほぼ同意見であり、文学作品を場所と結びつけて(つまりは地理学的に)扱う方法には、次の二つがあるように思われる。

① 場所(従来の研究では都市であることが多かった)を描いた文学作品(テキスト)を解説することによって、その場所を一種のテキストとして理解しようというもの。乱暴な言い方かもしれないが、昔から地理学が地理学者の「目」すなわち景観や生活様式や地域的特性によって場所を理解してきたと同様のことを、文学者の「目」によって行うということであり、これは紛れもなく地誌であり都市誌である。

② 文学作品(テキスト)を解説することによって、その作品世界(ないしは作品の舞台)に対する作者のイメージ(私はかつてこれを個人的場所イメージと名付けた。内田, 1987)を明らかにしようとするもの。私の理解では、現状では、人の

主観的空間(言い換えるなら心の中にある空間、つまりは場所)を対象とする点において、従来の認知行動論的地理学の延長線上に位置づけられているように思う。ただし、その方法は計量的手法ではなく、いわゆる人文主義的な方法(?)に依っている。

しかし、このいずれの種類の研究も、地理学者が独自に発見した鉱脈というわけではない。おそらく地理学者が目を向ける以前から、文学において行われており、また今も行われているはずである。こういうジャンルは学際的分野であるから、同じテーマを地理学者と文学者が扱うことは全然不自然なことではないし、地域を見慣れた地理学者の視点によってなされた作品の解説は、確かに文学者のそれとはひと味違うかもしれないが、文学を読み解くという手法において、あるいはもっと広く芸術(Scienceに対するArtの意味で)を解釈する手法において、文学者に勝ることは大変難しいのではなからうか。なにしろ文学の解説は、彼の地の土俵である(いわゆる餅は餅屋)。したがって、文学作品を用いて、ある場所の地誌を記述するなり、ある作家のイメージ誌を記述するなりするだけでは、敢えて地理学者が文学作品を題材とする理由としては、少々物足りないような気もするのである。

私は地理学の特徴の一つ(それは地理学者の特技の一つともなるのだが)が、異なる学問領域を空間ないしは場所というキーワードで結びつけることができるという、統合的性格(または折衷的

性格、良い意味でも悪い意味でも)にあるのではないかと考えているので、例えば、芸術としての地誌や作家個人の世界観を、その場所や人間を取り巻く自然・社会・経済・文化といった環境と関係づけたり、あるいはそこに相関や因果関係を見出したりすることを目的の一つとして加えることによって、少なくとも地理学者が敢えて文学空間を題材とする積極的な意義を見いだせるのではないかと思う。

ところで、本稿がテキストとして扱う題材は、文学作品ではない。明確な作品世界を持つ芸術作品が、文学だけに限られるものではないことを思えば、同様の手法を使って文学以外の作品をテキストとすることは、方法的にはそれほど変わるところはないからだ。

その流れからすれば、文学作品の次に、いずれマンガをテキストとした論考が発表されることは、おそらく予想されたことであろう。なぜなら近年におけるマンガおよびアニメは、その芸術表現としての成熟度からも、いまや文学や演劇と同様に解釈すべきテキストとして重要であると見なされはじめたようであるし、なにより社会への普及の度合いという点からすれば、現代文化に占める重要性において、決して無視できない位置を占めているからである。

例えば、近年、四方田(1994)や別冊宝島(1995)のように、マンガを芸術表現の一ジャンルとして正面から分析しようと試みた著作や、大塚(1989; 1992)や岡田(1996)のように、カウンターカルチャーとしてのマンガやアニメが現代社会に対して持つ意味について真面目に論じた著作が出版されるようになり、つい最近(1996年7-9月)にはNHK人間大学でマンガが講義題目として取り上げられた(『マンガはなぜ面白いのか—その表現と文法』講師:夏目房之介)。マンガもそうだが、とくにアニメは、映画やテレビといった大衆

向けの娯楽メディアを通して、時として多くの人々に共通の観念(イメージ)を植え付ける点で、社会に与える影響は格段に大きいと考えられる。

本稿ではテキストとしてアニメーション映画『風の谷のナウシカ』(徳間書店・博報堂、1984年、117分)を取り上げるが、その理由は、この作品が原作・脚本・監督を一人で担当した宮崎駿の環境観が最も端的に表現された作品であると同時に、数多くの映画賞を受賞したことにも表れているように、芸術的にも十分評価されており、また興行的にも大成功を収め、名作としてその後もテレビ放映やビデオ化されることによって、非常に多くの人々に鑑賞され、影響を与えてきたとみなされるからである。

アニメーション作家の宮崎駿は、これまでに『天空の城ラピュタ』(1986)『となりのトトロ』(1988)などの劇場用作品を脚本・監督し、一定以上の評価を得つづけていることは周知の通りであるが、その作品の中で常に語られてきた重要なモチーフの一つが、「人間と自然との関わり合い」であり、「自然とどうつき合うべきか?」という問題であったと考えられる。

本稿は、まず映画『風の谷のナウシカ』をテキストとして読み解き、そこに描き込まれている作者である宮崎駿のメッセージと、その背後にある作者の「自然-人間」観を明らかにする。その後、この作品の、特に後半部分に現れるストーリー上の矛盾から、宮崎駿の環境観がもっている問題点を指摘し、こうした環境観が登場する理由について考えたい。また同時に、この作品を鑑賞した現代を生きる人々にとっての、地球環境に対する認識についても言及する。

なお、映画『風の谷のナウシカ』には、宮崎駿が描いたコミック版の原作があるが、映画公開後も書き続けられ、何度かの休載ののち1994年によく完成した。はじめの方こそ映画とほぼ同

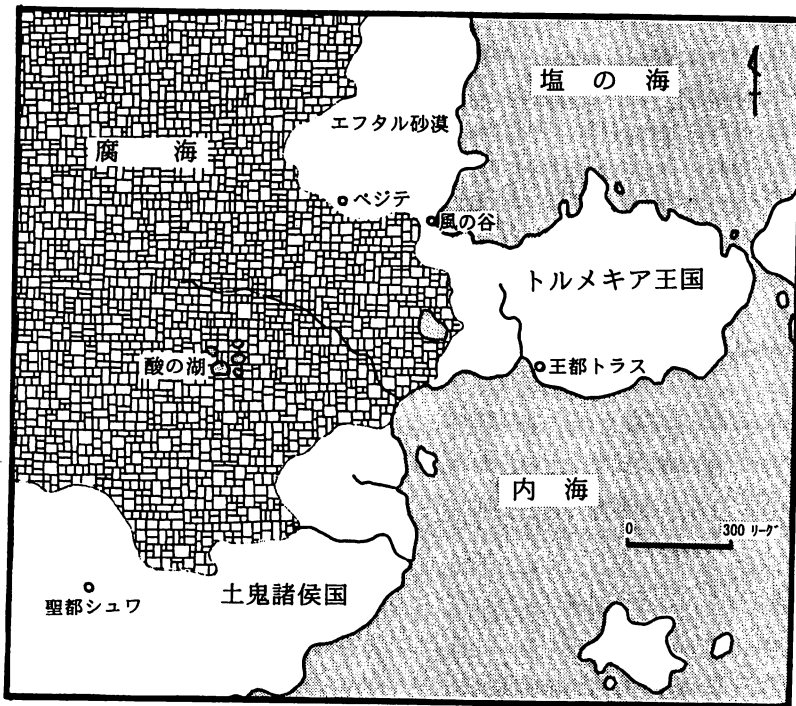
じ内容だったものの、結末は全く異なるものとなった
 といわく付きの原作であるが、この原作と映画との
 違いについても述べてみたい。

2. 映画『風の谷のナウシカ』に描かれた世界

作品の冒頭、アヴァンタイトルにおいて、「巨大産業文明が崩壊してから1000年 錆とセラミック片におおわれた荒れた大地に くさった海…腐海（ふかい）と呼ばれる有毒の瘴気を発する菌類の森がひろがり 衰退した人間の生存をおびやかしていた」というスーパーが入り、物語の舞台が紹介される。

巨大産業文明の崩壊については、コミック版（原作）第1巻冒頭に「ユーラシア大陸の西のはずれに発生した産業文明は 数百年のうちに全世界に広まり 巨大産業社会を形成するに至った

大地の富をうばいとり大気をけがし 生命体をも意のままに造り変える巨大産業文明は 1000年後に絶頂期に達し やがて急激な衰退を迎えることになった 「火の7日間」と呼ばれる戦争によって都市群は有毒物質をまき散らして崩壊し 複雑高度化した技術体系は失われ 地表のほとんどは不毛の地と化したのである その後産業文明は再建されることなく 永いたそがれの時代を人類は生きることになった」と説明されており、ここでいう産業文明が、18世紀にイギリスで始まった産業革命を指しているとするれば、「火の7日間」戦争の起こったのが今から約1000年後であり、物語の舞台は、その戦争のさらに1000年後、すなわち西暦4000年頃の地球ということになる。ただし、戦争によって地形が変化したのであろうか、設定地図からは物語の舞台となる場所が現在の地球上のどこであるかは特定できない（第1図参照）。



1 リーグは1ノット (1.852km) の設定

第1図 『風の谷のナウシカ』の舞台

(コミック版『風の谷のナウシカ』により作成)

この2000年後の地球において、自然は人間の生命を脅かす存在であり、自然と人間とは対立関係にあって、そこに協調の余地はない。そのような自然の象徴が「腐海」と呼ばれる、猛毒の瘴気を発する菌類植物の森、そしてそこに棲む王蟲（オーム）や地蟲・翅蟲といった生物である。「腐海が生まれてより千年、幾たびも人は腐海を焼こうと試みてきた。が、そのたびに王蟲の群れが怒りに狂い、地を埋めつくす大波となって押し寄せてきた。国を滅ぼし町をのみこみ、（中略）やがて王蟲のむくろを苗床にして孢子が大地に根をはり、広大な土地が腐海に没したのじゃ」という、風の谷の長老大ババさまの科白に示されるように、強靱な生命力を持つ王蟲＝腐海は、地球自身の復元力の象徴であり、同時にそれは「火の7日間」において、人類が使用した生体兵器「巨神兵」によって地球そのものをも焼き尽くした人類の文明への復讐ともみることができる。

一方、圧倒的な猛威を振るう自然に対する「人間」の側として、映画では、風の谷・トルメキア・ペジテ市という三つの異なるタイプの社会が登場する。

トルメキア（ただし国そのものは映画には登場しない）はわずかに残存した機械文明に依存する国であり、武力によって領域を拡大しようとする軍事国家として描かれる。機械文明の象徴である巨神兵（おそらくバイオテクノロジーの粋によって造られ、「火の7日間」で地球を滅ぼした究極の兵器＝現代における核兵器の比喩）を手に入れることで、周辺くる列強諸国より優位に立とうとしている。迫りくる腐海の脅威に対しては、巨神兵を使って腐海を焼き尽くすことを目論み、再び人間による地球の再生とその支配を画策する。

ペジテ市はトルメキアのような軍事国家ではないが、かといって農村でもなく、城壁に囲まれた都市（おそらく産業は手工業）として登場する。

トルメキアの軍事化に危惧を抱いており、巨神兵の力を戦争の抑止に用いようとしていた。トルメキアほど積極的ではないが、必要があれば王蟲（自然の象徴）の子供をいためつけ、これを軍事的に利用することも辞さない。

これに対し、主人公ナウシカの住む風の谷は、巨大な風車とブドウ畑の景観や、そこに住む人々の生活様式から、中世ヨーロッパの農村を彷彿とさせる「ムラ」である。この村は前近代的農村共同体のイメージで描かれており、自然との調和を保ちながら、これと共存しようとするかのようなのである。しかし、風の谷も、より自然の側に近いものの、文明の側に属することにはかわりはない。風の谷の農業を基盤とする一見のどかな生活も、腐海の脅威と隣り合わせのものであり、実際にナウシカの母親や兄弟は瘴気のために死に、父親である族長ジルや老人たちもまた病に冒されている。腐海の森の孢子が紛れ込めば、村人は躍起になってこれを焼くのである。

つまり「人間」の側は、風の谷<ペジテ市<トルメキアの順に、より文明への傾斜を強めていくものの、いずれの人間社会も、「自然」の脅威にさらされ、やがて拡大しつつある腐海に飲み込まれようとしている点では共通しており、自らの生命を賭けて自然と対峙している。ストーリーは、この「自然（地球）」と「文明（人間）」の対立という、全編にわたる緊張状態を軸に展開する。むろん、これはこの20世紀の現代世界で近年論議されている、一連の地球環境問題の暗喩である。

このような「自然」と「人間」との決定的な対立のなかで、その両者の「境界」にただ一人だけ位置するのが、主人公のナウシカである。ナウシカの人物像は、ギリシア神話の『オデュッセイア』で主人公オデュッセウスを助ける純粋な乙女ナウシカアーと、『堤中納言物語』の中に出てくる、毛虫や芋虫を厭わない変わり者の姫、虫愛する姫

君から創造された（宮崎駿「ナウシカのこと」、原作第1巻裏見返し）。彼女は、幼い頃の回想シーンで王蟲の幼生を庇う場面や、「わたし生きるの好きよ。光も空も、人も蟲も大好きなもの！」（原作第4巻、91頁）という言葉に示されるように、人間でありながら、人間に対するのと同じ愛情を、あらゆる生命すべてに注ぐことができるゆえに「自然と人間との境界」に位置する。

だからこそ、彼女がともに愛情を注ぐ「自然」と「人間」が決定的な対立を迎えたとき、どちらの側にも属する両義的存在として、ただ一人苦悩することになる。巨神兵を乗せた飛行艇が墜落したことから、それまで腐海にもトルメキアにも逆らわないことで平穩を保ってきた風の谷が、否応なく腐海（自然）とトルメキア（文明）との対立の中に巻き込まれることによって、物語は転回しはじめる。ナウシカは否応なく「自然」と「人間」の板挟みになり、王蟲と人間との全面对決を前にして、どちらの側につくかという二者択一の苦渋の選択を迫られることになるのである。

3. 映画『風の谷のナウシカ』の矛盾

さて、映画の後半、王蟲の子が囹として連れ去られ、酸の湖の中州でナウシカがこれを助けようとするあたりから、この映画はクライマックスへと突入する。自然と人間との境界に位置する主人公が、文字通り酸の湖を挟んで対峙する、王蟲の大群と巨神兵を擁したトルメキア軍との中間（しかも中州という孤立した場所）で、いよいよ両者の板挟みになるのである。進むも退くも叶わない絶体絶命のところまで追い込まれた主人公が、たった一人でこの窮地をどうやって切り抜けるのか、息詰まるような状況にどのようなカタルシスが用意されているのか、ラストシーンまでの約20分間、おそらくほとんどの観客は、この映画の中

にぐいぐいと引っ張っていかれるのではなからうか。

しかしながら、実は最も感動的なこの部分にこそいくつもの矛盾があり、作品全体のストーリーを破綻させているのである（大塚、1988；佐藤、1992）。確かに宮崎駿の圧倒的な映像の素晴らしさとその演出力が、ストーリーの破綻を覆い隠し、知らぬ間に見る者を納得させてしまうが、画面から離れてよくよく冷静に考えてみると、そこに矛盾のあることは隠しようもない。

その最大の疑問は、映画のクライマックスからラストシーンに至る「問題の解決」の仕方にある。「人間と自然が対立したとき、人間の側につきべきか、それとも自然の側につきべきか？」という難題（そしてそれはこの作品の中核となるテーマ）に作者が出した結論は、「腐海の毒は実は穢れた環境を浄化していた結果であった」という設定を突然持ち込むことによって、それまで正面から対峙していたはずの腐海（つまり自然）が、本当は人間の味方だった、というものであった。つまり、人間の敵対者と思われていた「自然」は決して人間を見捨ててはいなかったのであり、映画のラストで、命を投げ出したナウシカは、「自然」の象徴である王蟲の力によって「青き衣の者」の伝説の救世主すなわち神として再生する。トルメキア軍は戦争の空しさを悟って退却し、王蟲たちもまた整然と腐海へ戻っていく。そして「自然」と「人間」が融合した明るい未来が暗示される。

しかし、これで本当にハッピーエンドなのだろうか。あの映画の後、風の谷の人々はどう生きるとするか？住むところがなくなったベジテ市の人々はどうするのか？エンディングを見ると風の谷に住むらしいが、その限られた狭い土地でその人口をどうやって支えるのか？そもそも風の谷は瘴気に襲われたのではなかったか？いずれ風の谷も腐海に飲み込まれる運命にあったのではなかったか、

その解決は？そして、たとえ腐海が地上を浄化しているとしても、全ての浄化が終わるためには長い年月が必要であるし、第一地球上の全てを腐海が覆わねばならないわけで、そうなれば人類は一人として生き延びることはできない…。

こうした未解決の問題が山積しているのに、エンディングのテーマ曲が流れるなか、風の谷のどかな農村風景が描かれ、主人公や風の谷の人々は喜々として、全ての問題は消え去ったかのごとくである。そして、腐海の底に置き去りにされたナウシカのヘルメットに守られているかのように、チョコの実の木が芽を出しているという画面（言うまでもなく、これは地球環境の再生が人間とともにあることを暗示したものだ）でエンドマークとなる。しかも、この一連のラストシーンは正規のシーケンスとして真正面から描かれるのではなく、エンディングのタイトルバックとしていかにも付加的に描かれる。すでに佐藤（1992, 60-61頁）が指摘しているように、物語全体の結論部分でも言うべきラストシーンに、エンディングの音楽とエンドロールがかぶるという方法は、宮崎駿・高畑勲の他の作品のラストにも共通してよく使われている方法で、それは事実とも夢ともはっきりさせないかたちで物語を終わらせ、ストーリー上の破綻を観客に感じさせないようにする演出上の欺瞞とも読むことができるのである。

4. 映画『風の谷のナウシカ』の「自然—人間」観

それではこのようなストーリー上の矛盾はどうして生じたのだろうか？その点を明らかにするには、問題を整理して、自然と人間との関わり方についての前提条件から、どのような世界観が矛盾なく導かれるかを考えてみればよい。

自然と人間とが対立しているという前提に従う

限り、この両者に対する関わり方については、つまりまるところ次の二つの立場しか存在しえない。

- ① 自然<人間……「自然より人間を優先すべき」とする立場
- ② 自然>人間……「人間より自然を優先すべき」とする立場

①の立場は、人類にとって当然選びやすい選択肢であり、事実これまでの人類の歴史上、疑問の余地もなくこの立場が常に選ばれてきた。政治指導者や資本家をはじめとする、現代の大部分の人々が支持する立場もおそらくこれである。確かに人間優先で自然を痛めつけてきた結果、人類の将来的な存続が危ぶまれてはいるが、にもかかわらず多少の譲歩があるとはいえこの立場が支持されるのは、人間があってこそその環境であり、また人間は自らの手で滅亡するほど馬鹿ではないというヒューマニズムの精神に基づくものであろう。

映画の中においてこの立場は、巨神兵の力によって腐海を焼き払い、自らの手で地球を人間の住みやすい環境にしようとしたトルメキアの人々がとっていた。もしも、宮崎駿がこの立場に従って作品を作っていたとすれば、人間に害をなす腐海は巨神兵によって焼き尽くされ、人類は一から出直し、しかしその英知によって再び力強く、新たな文明を築き上げていったことだろう。もちろん、トルメキアが敵役であり、映画の中では完全に敗北したことから、宮崎駿がこの考え方を批判しており、完膚無きまでに打ちのめしていることはすぐわかる。

確かに、1960年代までの、科学の万能が人類のバラ色の未来を保証していた頃ならいざ知らず、現在の世界情勢や地球環境の状況がヒューマニズムに基づいた楽観的な未来の予測を成り立ちにくくしているのは、まぎれもない事実である。しか

も大局的にみれば、こういった不安を承知の上で、人々は加速度的に破滅へ向かって突き進んでおり、一向にブレーキをかける気配はない。例えば、近年ブームとなっている、新興宗教やオカルトといった精神世界への傾斜、異界への憧れなどは、こうした文明や人間に対する不信に起因するのかもしれない。残念ながら、この立場の未来は人類の滅亡へとつながっている可能性が強い。

かといって、②の立場も人類には受け入れがたい選択肢である。なぜなら、この立場に従うと、人間の生が自然にとって最大の脅威であり悪であるわけであるから、人類の一刻も早い滅亡こそ最善の道ということになってしまう。人類の滅亡を肯定するような反ヒューマンズ的思想が現実を受け入れられるはずはないが、人類滅亡というカタストロフによって問題を解決するというモチーフは、未来を描いたSF作品などにかなり見られる。

じつは映画『風の谷のナウシカ』の前半は、この立場で描かれていた。悪いのは、かつて取り返しのつかない戦争を引き起こして自然を破壊した人間であり、同じ過ちを繰り返そうとするトルメキアやペジテの人間であるのに対し、王蟲はじめ腐海のものすべて善であり、ナウシカも少なくとも人間の側に荷担しないが故に善であった。明らかに宮崎の心は、「人間」より「自然」の側に傾いている。だから、クライマックスで王蟲が人類を蹂躪し、トルメキアも風の谷もみんな腐海に飲み込まれてしまえば、その後長い年月を経て、地球は復活し、元の生命に満ちあふれた星になった、という話になり、ストーリーとしては何の矛盾も生じなかったはずであった。

しかし、宮崎駿はそうしなかったのである。論理的には生きるべきではない人間を生かそうとしたために、作品の中に多くの矛盾をかかえてしまった。というより、あえていくつもの矛盾点を抱え

てまで人間を生かそうとしたと言ったほうが適切だろう。それはまた、彼がヒューマンストであったことを意味する。

その結果として、劇中ナウシカが（それは同時に宮崎駿が）選んだ道は、①でもなく②でもない、第三の選択肢であった。すなわち、人間（文明）を自然の対立項とする設定が間違っていたと考え、「人間も自然の一部である」と設定し直すことによって、人間と自然の決定的な対立を回避しようという立場である。

③ 自然=人間……「人間も自然の一部である」とする立場

もともと自然を人間の対立項と見なす考え方は、人間と人間以外の生物とを明確に区別するキリスト教の影響を受けた西洋流の自然観から来していると考えられる。キリスト教における自然環境とは、樂園喪失以後の人類が原罪をあがなう煉獄としての、人間に敵対するきびしいものであって、これは人間が知恵と力で組み伏せるべきものとして存在する。

これに対して、日本人が伝統的に持っている自然観では、ずっと自然と人間との距離が近かった。日本の神話や民俗伝承を持ち出すまでもなく、現代においても「神=自然」「偉大な自然」「人間は自然に抱かれて生きている」といった考え方に特に違和感を覚えない日本人は多いのではないだろうか。そこでは、自然は人間にとって敵対するものではなく、「守護者」あるいは「母」のイメージに近いものとして捉えられる。困ったときには、必ず母が助けてくれる。それは、作者の宮崎駿はもちろん、映画を観ている我々にとっても、心情的に受け入れやすい、魅力的な選択肢ではあった。映画『風の谷のナウシカ』の後半は、この③の立場に沿ってむりやり話が組み立てられていく。

しかし、心情的にはどうであれ、この考え方に基づく限り、すでに見たように多くの矛盾からは逃れられない。なぜなら、この物語の大前提が「自然」と「人間」の対立だったわけだから、③の立場は実際には存在しない、いわば幻想であり、これを選ぶことは論理的に不可能なのである。結果として、この矛盾を解決するためには、奇跡すなわち神を登場させるしか道はなく、そのとおりナウシカは神になったのだが、そのことが緻密だった作品世界から一挙にリアリティを失わせることになった。いわゆる「予定調和」「ご都合主義」と呼ばれる結末になってしまったのである。

5. 宮崎駿と自然保護主義の環境観

宮崎駿が作品世界の矛盾という犠牲を払ってまで、この自然と人間をとともに生かす環境観にこだわるのには、彼が1941年に東京で生まれ、終戦直後の民主主義教育の影響を最も強く受けた世代であることと無関係ではないと思われる。学生運動には直接参加はしなかったが、1960年代に青春期を過ごした彼が、社会主義思想に対して憧れと理想を抱いたとしても、それは時代の流れからすれば自然である。

その理想の社会、理想の人間の生活のあり方は、おそらく、この作品中の風の谷に典型的に描かれた「ムラ」の姿である。それは、村人たちが生き生きと生産にいそしみ、互いに助け合い、楽しみを分かちあって暮らしている、質素で貧しいけれども充実した「理想の共同体」であった。そして、他の彼の作品の中でも、常に宮崎自身が思い入れを込めて選ぶ舞台は、もちろん都市ではなく、かといって伝統的な日本の農村でもなく、現実には存在しない理想の共同体である。

しかし残念ながら、この宮崎駿の理想が、映画『風の谷のナウシカ』が大きな矛盾を抱える原因

となってしまったことは、間違いない。そして、この作品の中心テーマが、現代の地球環境問題の暗喩であったことから想像がつくように、『ナウシカ』が抱えていた矛盾は、現代の環境問題が抱えている矛盾でもある。彼があえて選んだ、理想への、しかし矛盾に満ちた道は、決して彼一人のものではなく、現代人の地球環境観に、ごく普通に見られる考え方だからである。

その典型的な例を、我々は、一種の流行として安易に自然保護を標榜する人々の「自然－人間」観に見ることができるような気がする。いわゆるエコロジストと自らを呼んでいる一般の人々の多くは、自然とは好ましいものであり、これを守ることは「善いこと」で、少なくとも自分はこれを守っている「善い人」とであると、短絡的に何の疑問もなく思っているふしがある。

おそらく多くの人にとって「自然」とは、澄んだ空気に清らかな水、美しい夕焼けをバックにきれいな花が咲き乱れて、小鳥がさえずり、リスやコアラが木陰から顔を出すような、美しい風景のイメージとしてあるのだろう。しかし、実際はそれだけが自然ではない。ゴキブリやハエやペスト菌がウヨウヨいるのも自然、道もついてない藪の中で、いつトラやクマに襲われはしないかとビクビクしなければならないのもまた自然であることを、彼らはしっかりと自覚しているのであろうか。極端な話、彼らが地球環境のために、不潔で、不快で、不便で、危険に満ちた毎日を送る覚悟があるとは、とても思えないのだが。つまり、エコロジストの求める自然とは、多くの場合、食料と安全を保障された（もちろんそれは人間の文明によってもたらされたものである）限定つきの、しょせん人間にとって都合のいい「作られた自然」なのではあるまいか。

こういったレベルの自然保護主義の立場とは、ナウシカと同じく「自然も好き、人間も好き」、

つまり自然は守りたいが自分の快適な暮らしも捨てたくないという、人間にとって都合のいい折衷案であり、皮相的には「自然>人間」という②の立場をとるかのよう見えながら、その実、本質的には人間を優先させるという①の立場にある点において、しょせん欺瞞といわれても仕様のないものである。もともと欧米から始まった自然保護運動が、先に述べたキリスト教的な西洋流の環境観に基づくものであることを思えば、その本質は人間のために自然を手なずけ、改造するという点で、①の立場に近い。そもそも自然を「保護」するという感覚自体が、例えば親が子を、飼い主がペットを保護するといったような、上下関係の存在を前提としており、はじめから自然を人間よりも一段下のものとして位置づけた、いかにも欧米らしい人間中心の見方である。

しかし、日本においては、宮崎駿がそうであったように、伝統的な「甘え」の構造と結びついた結果、自然保護は①でも②でもなく、③の立場として理解され、その内部に抱える矛盾はさらに大きく、わかりづらくなったのではないだろうか。そして、このような大きな矛盾を抱えている以上、この甘えた選択は、「自然か、さもなくば人間か」という二者択一の厳しい条件（そして現代の地球環境問題は、もはやその程度に深刻化していると思われる）のもとでは、決して本質的な問題の解決にはつながらない。

もちろん、具体的な自然保護行為が全く無意味であるとは思わないが、こうした自然保護の考え方自体が本質的に矛盾をはらんでおり、映画『ナウシカ』と同じように、決してハッピーエンドにつながるものではないことを自覚しておくことは、たいへん重要である。なぜなら、すでに指摘されているように（別冊宝島、1989；湯川、1990；植田、1992、など）、例えば、割り箸廃止運動、牛乳パック回収運動、捕鯨禁止運動のような自然保

護運動は、生態学の原理を理解し、綿密なデータに基づいた、論理的な運動というよりは、淡いイメージに基づく、多分に情緒的・感情的な運動であるように思われるからである。

実際には矛盾を抱え込んでいながら、それに気付かず、自分は自然を保護している「善い人」なのだという自己満足感に基づいた、情緒的な地球環境観が、流行としてのエコロジーを一種の免罪符としてしまい、人々の目を本当の問題から遠ざけてしまうことになることが危険なのである。

6. コミック版『風の谷のナウシカ』と東洋の世界観

以上述べてきたように、映画『風の谷のナウシカ』は、作者の理想を優先した結果、ストーリーの展開において不自然さを抱えこんでしまった。このことは、おそらく作者である宮崎駿も、はっきりと自覚していたはずである。それは、映画と平行して発表されたもう一つの『ナウシカ』である、コミック版の紆余曲折に読み取ることができる。映画に先立って1982年2月に始まったコミック版の原作は、はじめのうちこそ映画版とほぼ同じ展開でストーリーが進んでいったが、映画公開後から徐々に映画のストーリーを離れはじめ、やがて連載は何度も中断、最終的には連載開始から13年目の1994年3月に、映画とは全く違った形で結末を迎えた。

おそらく当初の予定では、映画のラストとほぼ同じ結末が用意されていたのではないかと考えられるが、映画公開とともに、このストーリーが持っている矛盾も指摘され、本人もその矛盾に気づいた結果、コミック版『ナウシカ』は、誰もが、そして作者自らも納得できる結末を求めて、さまよい出すことになったのであろう。その後のいく度かの中断を挟んでの10年という長い年月は、

その間の映画製作で忙しかったこともあろうが、映画版の抱えていた矛盾を乗り越えるための作者の苦闘の痕とみることもできる。したがって、この映画公開以後のコミック版のストーリーは、映画版の矛盾に対して作者が出した新しい答えであり、それはまたこの10年という時間の中で、宮崎駿の「自然-人間」観がどのように変化したのかを示すものでもある。

コミック版での作品世界の設定は、映画版より複雑になっており、トルメキアとその南方にある土鬼（ドルク）との戦争に、トルメキアの属国である風の谷が巻き込まれるという形で話は進んでいく（第1図参照）。ストーリーは、はじめのうちこそ映画同様、「自然」対「人間」の対立の図式を中心に描かれていたが、やがてトルメキアと土鬼の戦争が話の軸になっていき、かつての「火の7日間」と同じことを繰り返そうとする愚かな人間同士の争いを、主人公が何とかやめさせようとする話を中心を占めるようになる。

ここでいったん連載が中断され、長い休載の後に再開した物語では、ついに大海嘯が起き、腐海や王蟲が地球環境を守るために存在していたことがはっきりと宣言される。ここでのナウシカの立場は、「蟲たちの方が私達よりずっと美しい……」（第5巻、143頁）という言葉に象徴されるように、はっきりと「自然」の側にあり、なおかつ、「人間が世界の調和を崩すと 森は大きな犠牲を払ってそれをとりもどします」（第6巻、24頁）、「腐海は私達の業苦です でも敵ではありません」（同、137頁）というように、人間はぎりぎりの線で腐海と共存していくことが可能であり（その先駆的例として「森の人」という一族が登場する）、それこそが人類の生き延びる唯一の道であることが説明される。

これは、映画における自然と人間の関係の構図と基本的には同じであり、「自然を優先すること

は、結果的に人間を救うことになる。なぜなら、人間は自然に守られる存在だから」という論理を、より明確に描いたものといえよう。映画においては、この論理があまりに唐突に現れ、あっという間にハッピーエンドへと展開したために、予定調和的なストーリーの不自然さを生じさせたことを考えると、戦いに明け暮れて他のことは省みない愚かな「人間」の行為と、献身的ともいえる「自然」の偉大な姿を対比させながら、じっくりと描いたコミック版では、その不自然さはかなり緩和されている。ただし、ドラマが複雑化したことによって、作品の構図自体が抱えている矛盾を上手に糊塗しただけであって、矛盾が本質的に解決されたわけではない。

この時点で、映画のラストシーンのような未来に希望を持たせるような形で終わらせることも可能だった。しかし宮崎駿はそうすることなく、作品は再び約2年の中断に入る。これは想像だが、これは作者が矛盾をはらんだままで作品を終わることを潔しとしなかったからではないだろうか？

こうして1993年に再開した後のコミック版『風の谷のナウシカ』は、それまでとは明らかに違ったトーンで、連載当初ではおそらく予想もつかなかった方向へとストーリーが展開していく。まず、「自然」の象徴と目されてきた腐海と王蟲が、実は人間によって作り出されたものであったことが明らかとなる。それどころか最後には、ナウシカをはじめとする人類も過去の人類によって計画的に作られたものであったことまで明かされる。つまり、作品世界には「文明」の対立物としての「自然」は、もともと存在しておらず、「自然」と見えたものも含めて、全ては「文明」の所産だったのである。当初の課題であった「自然」対「人間」の相克の問題は、ここにおいて全く意味を失い、主人公ナウシカのみならず我々読者も、今では「真実を見極めるために」（第7巻、133頁）

ラストシーンへと向かうことになる。

急転回するのは設定ばかりではない。「生命はどんなに小さくとも 外なる宇宙を内なる宇宙に持つのです」(同、133頁)、「生きることは変わることだ 王蟲も粘菌も草木も人間も変わっていくだろう 腐海も共に生きるだろう」(同、198頁)、「その人達はなぜ気づかなかったのだろう 清浄と汚濁こそ生命だということに」(同、200頁)というように、ナウシカは(というより作者は)全ての対立を超越して、あらゆるものを受け入れはじめる。これは明らかに東洋思想だ!

そしてラストシーン、ナウシカは最終地であるシュワの墓所において、かつての人類が作り上げた文明そのもの(それは作品世界の全てを作った張本人、すなわち神と同じである)を、「そなたが光なら 光など要らぬ」(同、219頁)と叫んで破壊する。ナウシカは(そして作者は)あらゆる文明を放棄し、「人間のための環境」でも、まして「文明の対立物」でもない、何の色ももたない、そこにあるがままの「自然」に従う道を選んだのである。

だが、それは当然ながら、人間に都合のよいハッピーエンドへとつながる性質のものではない。「生きましょう すべてをこの星にたくして 共に…(中略) 生きねば……」(同、223頁)という言葉に象徴されるラストシーンは、映画のラストシーンとは全く異なる形になった。

彼がこうした結論に到達したことは、「自然」の側にも立たず、「人間」の側にも立たず、なおかつ論理的な矛盾を避けるためには、ある意味で当然の帰結であったといえる。なぜなら、本当の意味において「自然」と「人間」を両立させるためには、「自然」と「人間」を分けて考えるという大前提そのものを包括するような、壮大な世界観を導入するしかないからである。そして、そのような包括的な世界観は、仏教や老荘思想(道:

タオ)などで用いられる東洋的な世界観として、我々日本人にとってはわりあい身近に存在している。

前章において、「人間の側に立つ(①の立場)」と「自然の側に立つ(②の立場)」以外に選択肢はなく、「人間も好き、自然も好き」という③の立場は幻想でしかないと言ったが、それは「自然」と「人間」を分けて考える、この問題の枠組みとなる世界観(それはもちろん、西洋的な二元論である)の中での話であって、この枠組み自体を否定してしまえば、③の選択は可能となる。

つまり、「人間」もまた文字通り「自然」の一部でしかなく、人類が自らの繁栄のために文明を生み出し、自然を変えてきた、歴史そのものをも、広い意味での「自然」の一部として全て受け入れてしまえば、「人間」を「自然」と同一視することができ、「自然」を取るか「人間」を取るかという二者択一の問題は、もはや意味をなさないのである。

しかし、このような考え方は決して明るい未来を保証しているわけではない。全ては「運命」であるとする、ある種の諦めの境地と結びつく可能性をも秘めている。それに従えば、人間が人間を殺したり、自然を破壊したりするのもまた「自然」であり、ネオン瞬く大都会こそ人間にとって最も適した環境であるという結論を導くことになる。結果としては、人類の環境破壊はおそらく野放しとなり、人類を近い将来待ち受けている破滅から救うことはできないだろう。なぜなら、人類の滅亡もまた大いなる「自然」の一部だからである。

しかし作者は、やはり人類を滅ぼしてしまうことをよしとしない。コミック版のラストで「文明」を根底から破壊したのは、人類が再び文明へと傾斜してしまう道を閉ざすことによって、その危険性を回避したものと思われる。それは、どうしても人間を生き残らせたかったヒューマニスト宮崎

駿の、最後の抵抗であったかもしれない。

いずれにせよ、宮崎駿がコミック版『ナウシカ』の最終巻において、その世界観がももとの西洋的な世界観から、こうした東洋的な世界観へほとんど傾斜していったことは、おそらく必然的なことであった。西洋的な世界観を前提として考える限り、自然と人間をめぐる対立と矛盾は永遠に解決できないのではないかと思えるからである。ただし、西洋的世界観によって始まった『風の谷のナウシカ』が、最後は東洋的世界観によって締めくくられたことは、「自然」対「人間」の対立という最初の問題提起の消滅を意味し、結果としては作品の自己否定を招くことになってしまった。

宮崎駿は、このコミック版を描き上げた後、新聞のインタビューに答えて、「光と闇。この単純な二分法がもう信じられないということです。人間が理性で行動してユートピアにたどりつけると思えた時期があった。しかし、最近の現実世界を見て、自分の考えがいかに観念的で甘いかを知りました。自分の中で何度も揺り返しがあって苦しいのですが、マルクス主義への未練は捨てようと決めました」（読売新聞、1994年5月30日）と述べている。

7. マンガ世代と未来像—結びにかえて

自然を優先しても、人間を優先しても、人類の滅亡は免れず、自然と人間を両立させるような道は幻想であり、東洋的な世界観によっても、死の恐怖からは解放されるかもしれないが、人類が滅亡するという点では同じであるとすれば、結局、自然と人間との関係に係わるどの立場をとっても、行き着く先は、人類にとって非常に暗澹たるものだと言わざるを得ない。それと関係があるのだろうか、最近のとくに若い世代が将来に対して持っている未来の地球のイメージが、非常に悲観的で

あることが、思い起こされる。

第1表は、昨年と一昨年、国士館大学と横浜国立大学の学生に対して、10年後100年後1000年後の人類及び地球の様子について自由に想像させた結果を集計し、示したものである。これを見ると、10年後の未来については大した変化はないと見ている者が多く、100年後には今よりさらに科学が進歩して便利になるという楽観的な見通しが多いのに対し、1000年後の未来については一転して悲観的な予想をしている者が多くなることが判る。とくに、全体の3分の1の学生が、この1000年以内に地球は滅亡すると回答していることは興味深い。

同時に、これらの未来のイメージを作るうえで影響を受けた情報源をも、ジャンルを問わず書いてもらったが、表を見るとわかるとおり、その情報源のほとんど全てが、アニメとマンガそして映画である。今回扱った映画『風の谷のナウシカ』も多くの学生に観られており、この調査でも、1000年後の未来のイメージに最も多く影響を与えている。しかし注意すべき点は、この作品が、すでに見てきたように、本来自然と人間の調和の重要性を描くという意図のもとに作られたものであるにもかかわらず、この調査では全ての事例が最終戦争の後に荒廃する地球、衰退する人類といった悲観的な未来のイメージの源泉としてこの作品を挙げていることで、この結果を見る限り、宮崎のこの映画に託したメッセージは、意外なほど学生たちには伝わっていなかったことになる。これが単に学生たちがテキストの読解力に欠けているからなのか、あるいは彼らが八方ふさがりの未来を直観的に知っているからなのか、わからないが、ただ彼らの身の回りにある情報、とくに最近のマンガやアニメあるいはSF映画において描かれる未来社会に、実際悲観的なものが多いのは事実である。

例えば、いろいろな意味において現代のマンガを一変させたと言われているマンガ家に大友克洋がいる。その代表作といわれる『童夢』や『AKIRA』の中で彼の描く都市の姿はまさに無機質そのものであり、その高度に文明化され機械化された大都市が、善とか悪とかの価値判断を越えて一瞬のうちに崩壊するその画像は、おそらく今の若者たちがイメージしているような、何の感動も伴わない世界の滅亡の姿とどぶっているように思われる。そこには例えば宮崎駿が『風の谷のナウシカ』で描いたような、いわゆるヒューマンイズムが欠けているが、それゆえにこそ、その作品世界は、未来都市を描くにあたって、かえってリアル

に感じられるのである。

かつて、日本の高度成長と歩調を合わせるかのように、1950年代に手塚治虫は例えば『鉄腕アトム』で、夢と希望にあふれた未来の都市の姿を描いた。その根底に流れているものは科学文明への信頼であり、その文明を築いた人間への愛であったと言っていいだろう。もちろん『鉄腕アトム』も世間で信じられているほどには、単純に科学万能を礼賛した明るい話ではない。しかし、科学の完全性に比べて、その科学を用いる人間が必ずしも完全ではない（手塚がよく描いた人間の不完全さは、例えば悪であり、不完全さの最たるものが恐らく人の生命に限りがあるということ）ところ

第1表 大学生が持つ未来の地球のイメージ

10年後	100年後	1000年後
楽観的未来 53(11.8%) 48 便利な世の中、科学の進歩 5 エコロジー、平和、世界の統合	楽観的未来 216(53.1%) 88 便利な世の中、科学の進歩 65 宇宙時代、スペースコロニー 21 機械化時代、ロボット 30 クリーンエネルギーの開発 12 エコロジー、平和、世界の統合	楽観的未来 133(32.4%) 39 便利な世の中、科学の進歩 73 宇宙時代、スペースコロニー 10 機械化時代、ロボット 11 エコロジー、平和、世界の統合
その他 268(65.8%)	その他 50(12.3%)	その他 16(3.9%)
悲観的未来 86(21.1%) 16 暗い時代、不安な時代 8 資源の欠乏、食糧危機 3 地震 5 戦争 50 環境悪化、気候変化 4 滅亡	悲観的未来 141(34.6%) 14 暗い時代、不安な時代 12 資源の欠乏、病気 3 地震 16 戦争 11 文明の衰退 72 環境悪化、気候変化、荒廃 (うち4 地下シェルターへ移住) (うち13 宇宙へ移住) 13 滅亡	悲観的未来 261(63.7%) 6 暗い時代、圧政 (うち2 宇宙へ移住) 17 戦争、星間戦争、被征服 15 文明の衰退 23 原始生活へ戻る 46 環境悪化、荒廃 (うち7 地下シェルターへ移住) (うち23 宇宙へ移住) 139 滅亡 (うち17 宇宙へ移住) 15 その他
計 407(100.0%)	計 407(100.0%)	計 410(100.0%)
影響を受けた作品 5 ノストラダムスの大予言 2 ハック・トゥ・ザ・フューチャー	影響を受けた作品 33 ドラえもん 19 機動戦士ガンダム 16 ハック・トゥ・ザ・フューチャー 5 スター・ウォーズ 5 銀河鉄道999 4 トータル・リコール 4 ブレードランナー 4 AKIRA	影響を受けた作品 15 風の谷のナウシカ 14 ドラえもん 13 機動戦士ガンダム 10 狼の惑星 8 スター・ウォーズ 8 火の鳥 6 銀河英雄伝説 6 銀河鉄道999

からドラマが生じるのである。常に人間の側から作品を描き、人間を信じ続けたという点において、手塚は最もヒューマンな作家であり、その視点は一貫して「人間（文明）」の側にあったといえる。

ここで戦後のマンガの歴史を述べている余裕はないので詳細は省くが、多かれ少なかれ手塚治虫の世界観の影響下にあった戦後のマンガの流れの中で、手塚を乗り越えることによって社会的に認知された作家の一人が、宮崎駿である。手塚と宮崎との最も大きな違いは、「人間（文明）」に対する信頼度の差にある。それはおそらく、宮崎が石油ショック以後の低成長期の日本において活躍したことと無関係ではない。しかし、すでに明らかにしたように、宮崎もまた人間を愛するという点において、ヒューマンイズムの作家であることに変わりはない。その、文明を批判しながら人間を愛するという矛盾をはらんだ世界観が、彼の作品を、ある意味において規制していることは、すでに述べた通りである。

たしかに宮崎の作品は今日においても大量の観客を劇場に動員する人気を持っているが、劇（ドラマ）としての破綻（押井，1984）が、現実の世界と宮崎の世界観とのズレから生じる必然的なものであるとするなら、その世界観がすでに過去のものになったことを示すのかもしれない（実際、最近の宮崎・高畑作品には、ノスタルジーの占める比重が高まっているような気がする。彼らの作品に最も共感しているのは、今の若い世代ではなく、もっと上の世代ではなかろうか？）。そして、今や大友克洋のような新しい世代の作家たちが、そしてその作品世界に共感することのできる若い読者たちが、着実に現れているのである。因みに、手塚治虫は1928（昭和3）年生まれ、宮崎駿は1941（昭和16）年生まれ、そして大友克洋は1954（昭和29）年生まれであり、彼らの生きた時代がちょうど一世代ずつずれているのは偶

然ではない。

本稿は、1995年度人文地理学会において発表した内容を修正し、加筆したものである。

資料

『風の谷のナウシカ』（ビデオ）、徳間書店／徳間ジャパンコミュニケーションズ。

宮崎駿『風の谷のナウシカ』1～7巻、徳間書店、1982-1994 連載。

宮崎駿『風の谷のナウシカ 絵コンテ』1・2、徳間書店。

文献

石井理香（1995）：押井守インタビュー。キネマ旬報臨時増刊第1166号『宮崎駿、高畑勲とスタジオジブリのアニメーションたち』26-31頁。

内田順文（1987）：地名・場所・場所イメージ——場所イメージの記号化に関する試論——。人文地理 39, 391-405。

岡田斗司男（1996）：『オタク学入門』太田出版

押井 守（1984）：前略 宮崎駿様—漫画映画について。徳間書店『風の谷のナウシカ絵コンテ 2』267-273頁。

大塚英志（1988）：『まんがの構造 増補新版』弓立社。

大塚英志（1989）：『物語消費論「ビックリマン」の神話学』新曜社。

大塚英志（1992）：『仮想現実批評 消費社会は終わらない』新曜社。

佐藤健志（1992）：『ゴジラとヤマトとぼくらの民主主義』文芸春秋、1992。

佐藤健志（1995）：共同体への夢と幻滅—ジブリ作品はどこに行くか。キネマ旬報臨時増刊第

1166号『宮崎駿、高畑勲とスタジオジブリのアニメーションたち』36-40頁.

杉浦芳夫(1992):『文学の中の地理空間-東京とその近傍-』古今書院.

杉浦芳夫編(1995):『文学 人 地域——越境する地理学』古今書院.

空の会(1993):『宮崎駿映画の風』創樹社.

槌田 敦(1992):『環境保護運動はどこが間違っているのか?』J I C C出版局.

福田珠己(1991):場所の経験:林芙美子『放浪記』を中心として.人文地理43,269-281.

別冊宝島(1995):『マンガの読み方』宝島社.

別冊宝島(1989):『地球環境・読本』J I C C出版局.

湯川順浩(1990):『ワリバシ讃歌』都市文化社.

吉本隆明(1984):『マス・イメージ論』福武書店.

四方田犬彦(1994):『漫画原論』筑摩書房.

焼岳足洗谷における堆積土石の分布とその移動過程

長尾 竜太郎

I. はじめに

上流に土石生産源を持つ山地河川は、土石流や泥流によって運搬された土石を河床に堆積させている。河床堆積地が形成されると同時に木本が侵入するので、この木本の年輪を調べることによって堆積地の形成年代を数値的に知ることができる。そこで上流に焼岳という土石生産源をもつ、岐阜県北部飛騨地方、吉城郡上宝村の溪流、足洗谷の堆積地の分布を調査し、堆積地の分布の特徴をとらえ、堆積地の空間的・時間的分布と、その移動過程を明らかにすることをこの論文の目的とする。

II. 樹木および群落年代学的手法による河床堆積地の研究史

裸地に侵入した樹木の年輪によって、土地に地すべりが起こった年代を推定する、樹木年代学的手法を確立したのは東（1967）である。東は傾斜木の直伸枝の年輪や、『アテ』、『樹皮巻き込み』、『萌芽』、『不定根』など、年輪に生じる異常材から、100年以内程度の時間スケールのなかでの地表変動現象を把握するうえで、有効な手段を示した。

この方法を応用して、北海道でも有数の荒廃諸河川で調査を行ったのが新谷（1968・1971）である。新谷は土石が衝突して生じる奇形樹や、腐食層と泥砂層との互層、埋積樹などの情報や、河床堆積地の微地形情報などから土石移動過程を明らかにし、さらに距離軸上の同齡林年代分布から、荒廃溪流における土石移動過程を四種類のパター

ンに区分した。以上のことから、溪流地形研究における樹木および天然性同齡林分からの群落年代学的な適用手法を確立した。

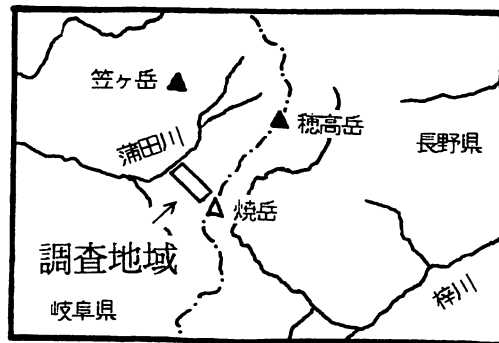
この研究手法は笹（1979）によって、扇状地面上に成立する同齡林のモザイク状分布から、流路変動の履歴と扇状地形成過程を明らかにする扇状地研究に展開された。

以上の樹木および群落年代学的研究によって、河川の土石移動に関する時系列変動を比較的長い区間にわたって復元することが可能になり、河川での土石移動現象の非正常性、上流部での堆積地形変化が時間的遅れを伴って、下流部での堆積地形変化に影響することなど、具体的なデータを伴って語るができるようになった。

III. 調査地域の概要

1. 位置・地形

調査地域の足洗谷は、岐阜県北部飛騨地方の吉城郡上宝村にあり、富山県にそそぐ神通川の支流



第1図 調査地域位置図

蒲田川の一支流である(第1図)。ここで『足洗谷』とは河川・溪流の名称でもあり、その河川が形成した侵食谷の名称でもあるということを明記しておく。足洗谷を含む神通川水源地域は、中部山岳の槍ヶ岳、笠ヶ岳、穂高岳、焼岳などの高峰を有し、地形は極めて急峻で崩壊地が多い。

焼岳を水源とする白水谷・黒谷と、割谷山を水源とする割谷が合流して足洗谷になる。支流を含まない足洗谷の長さは2993mで、支流の白水谷・黒谷・割谷を含めた、足洗谷全体の流域面積は7.47km²である。水源である焼岳は、標高約2000m以上では植生がなくなり、火山噴出物が堆積した露岩地帯になる。そのため山頂付近では規模の大小はあるが、毎年数回土石流が発生し、下流に土石を供給している(諏訪他, 1985)。露岩地帯では保水効果が少ないので、多量の降水に山腹に堆積した土石の流失や崩壊をとまないと土石流や泥流が発生する。

また、有史以来多くの活動記録を持つ焼岳は、大量の火山噴出物を山腹に堆積させている。水源地域は火山噴出物からなる脆弱な地質に加え、温泉作用によって一部の堆積物が、層状に粘土化しているために崩壊をおこしやすく、一部に地すべり地を含んでいる。また、足洗谷は焼岳の火砕流堆積物によって形成された中尾台地が侵食され、形成された谷であることから、中尾台地そのものが崩壊地であり、現在も足洗谷の侵食による崩壊は進行している(神通砂防資料館)。

2. 地質

この地域は、飛騨外縁構造帯の一部にあたり、飛騨変成岩体の南東に位置する。そしてそれらをとりにくくように結晶片岩類、非変成の古生界、中世の堆積岩類、火成岩類、第四系の段丘、火山岩類などが分布する。また、構造線に沿って蛇紋岩類が挟在したりする。以上の構造を横切る形で、

御嶽山、乗鞍岳、焼岳などの火山が分布する(藤井他, 1970)。

足洗谷の基盤岩類は、上流部では粘板岩、輝緑凝灰岩、花崗岩などから構成され、足洗谷本流では石英斑岩を基盤とし、第四紀更新世の古期段丘礫層、足洗谷古期火砕岩流、中尾火砕岩流1, 2の順に形成された堆積物、火砕岩流の分布が認められ、特徴ある地形面を形成している。

IV. 調査方法

調査地である足洗谷において、堆積地の位置、平面形、比高、形成年代の計測・調査を行った。調査に使用した地図は、国土地理院発行1/25000地形図『焼岳』と『笠ヶ岳』である。

堆積地の位置と平面形はコンパスとメジャー、比高はハンドレベルとスタッフ、メジャーを用いて簡易測量を行った。空中写真による調査は、堆積地が小規模な場合精度が低くなるため行わなかった。堆積地形成年代は、堆積地上の本木から成長錐を用いてコアを採取し、年輪を数えた。コアは1堆積地につき2~3本、規模の大きい堆積地では5~6本採取した。

堆積地はつねに時間情報となる、天然性同齡林の樹齡と関連して位置づけたため、改めて以下のように用語を定義する。

a年堆積地：a年同齡林が成立している堆積地。

ただし、植生が侵入していないごく新しいものや、砂礫堆積地については、同齡林の成立している最も新しい堆積地の階級に含める。

谷幅：氾濫原を形成する全面の幅。階段状堆積地、低水時流水路を含めた左右両岸の山腹斜面端までを谷幅とする。

階段状堆積地の分布はすでに述べた方法による現地調査によって求め、年代は各堆積地の同齡林の指標植物の樹齡により推定した。

第1表 形成年代別堆積地特徴一覧

堆積地	樹齢＝形成年代	比高	分布と堆積地の特徴
a	3年＝1992年	≤0.2	流路に最も近い、裸地も含む
b	8年＝1987年	1.3	中・上流の砂防ダム堆砂池
c	15年＝1980年	1.6	中流部の二箇所のみ、地形面が他より不明瞭
d	28年＝1967年	2.1	下流部の狭さく部、側刻による倒木が見られる
e	33年＝1962年	3.4	中・下流部に分布
f	42年＝1953年	4.8	上流から下流まで、曲流部の反攻撃斜面に形成
g	55年＝1940年	7.8	中流部の反攻撃斜面に形成、堆積地h伴う
h	62年＝1933年	15.4	中・下流部中心に分布

V. 結果

1. 指標植物

足洗谷に分布する堆積地上に、十数種類の木本の生育が見られた。それらの中から、堆積地の形成年代を知るために年輪を採取する指標植物を、ケヤマハンノキに選定した。ケヤマハンノキは各堆積地に共通して成育し、なおかつ最も優勢な樹種であった。成長錐で採取したケヤマハンノキのコアは、乾燥させてしまうと年輪が読み辛くなるが、水をつけて繊維に水分をしみこませると読みやすくなる。年輪数の数え間違いのないように、とくに年輪数の多いものは注意し、年輪判読を3回繰り返した。その結果、足洗谷で採取した年輪数は、3, 8, 15, 28, 33, 42, 52～55, 58～62であった。また、比高が低い堆積地ほどケヤマハンノキの樹齢が若いことがわかった。

2. 形成年代別堆積地の特徴

各堆積地の特徴は第1表の通りである。a～hのアルファベットは、下位から上位へ年代別に分類した記号である。比高については、各形成年代ごとの、全ての堆積地の平均を比高として示している。

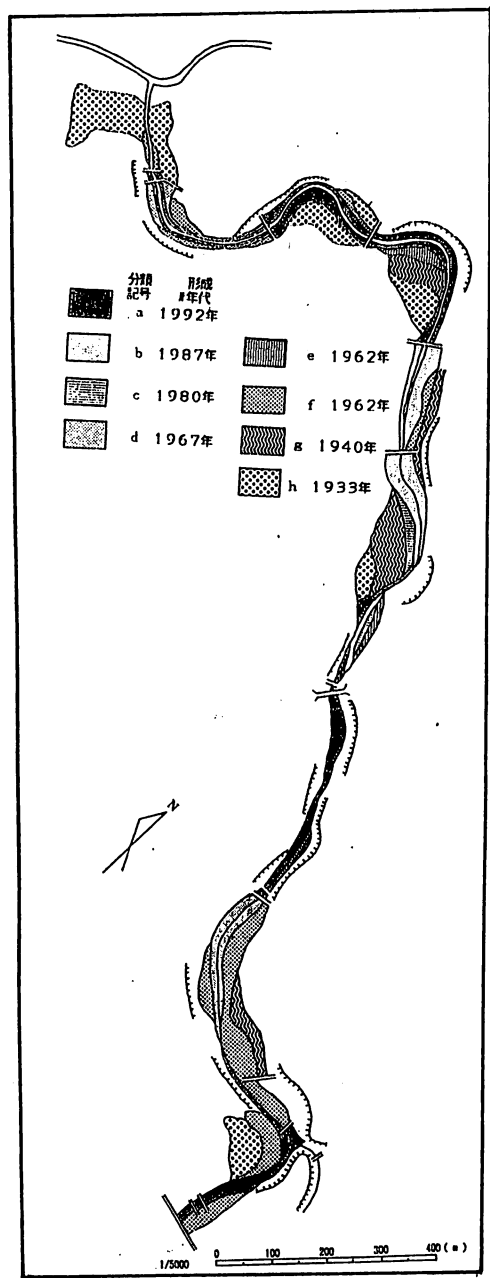
堆積地上に成育する、ケヤマハンノキの年輪か

ら推定した形成年代別堆積地分布図は、第2図のとおりである。

3. 谷幅と土石堆積量

形成年代別堆積地分布図から、谷幅と土石堆積量の推定をおこなった。形成年代別堆積地分布図に、測線を足洗谷と蒲田川との合流点から50m間隔に引き、谷幅を計測、単位をメートルに換算した。この結果に三移動平均をおこない、グラフであらわしたものが第3図の谷幅変化図である。これを見ると50m以上の谷幅が連続する区間と、逆に谷幅が30m以下の狭い連続区間があることがわかる。前者を流路拡幅部、後者を流路狭さく部とした。流路拡幅部は450m～1450m, 2150m～2850mまで、流路狭さく部は250m～400m, 1500m～2100mまでである。

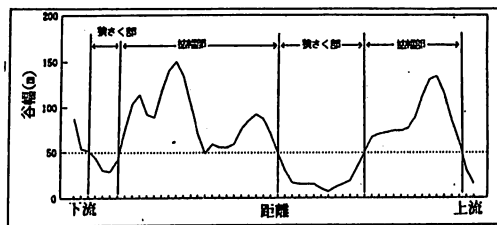
次に土石堆積量の推定は、形成年代別堆積地分布図に引かれた50m間隔の測線間に、どの年代に形成された堆積地が何平方メートル存在するのかを計測し、その面積にそれぞれの年代の堆積地の平均比高を乗じ、体積を算出したものを土石堆積量とした。したがって、堆積量の単位はm³である。面積の測定にはデジタルプランメーターを使用した。デジタルプランメーターで面積を測定すると、同じ堆積面であっても測定のたびに多少の誤差が



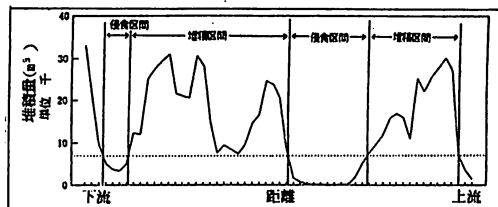
第2図 形成年代別堆積地分布図

生じ、測定数値が毎回異なった結果になる。よって、同一地形面の面積測定を3回おこない、その平均値を堆積面の面積とした。

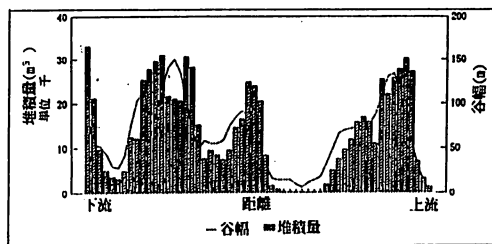
体積の測定結果をグラフであらわしたものが第4図である。このグラフも谷幅の場合と同じく、



第3図 谷幅変化図



第4図 土石堆積量



第5図 谷幅と土石堆積量の関係

三移動平均をおこなった。第4図を見ると、谷幅変化グラフと同様に堆積の連続する区間450m～1550m, 2150m～2800mと、堆積が非常に少ない区間250m～400m, 1600m～2100mが存在する。

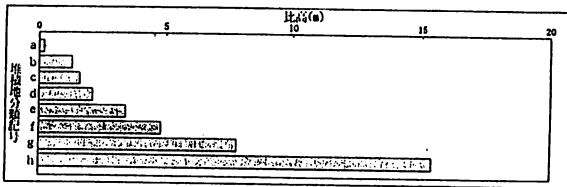
谷幅変化と土石堆積量の結果に三移動平均をおこない、グラフにまとめたものが第5図である。これは土石堆積量が谷幅の広さに対応していることを示している。つまり、流路拡幅部においては土石が多く堆積する土石堆積区間となっており、流路狭さく部においては土石の堆積が少ない土石侵食区間となっているのである。さらに土石堆積区間を二つに分類することができる。足洗谷が曲流し、攻撃斜面を侵食するために河道が広がり形成された、広い谷幅をもつ土石堆積区間と、足洗谷が比較的直線的に流下しているが、狭さく部に比べて相対的に谷幅が広い土石堆積区間である。ここで前者を曲流部、後者を拡幅部とする。

4. 形成年代別堆積地比高・総面積・総体積

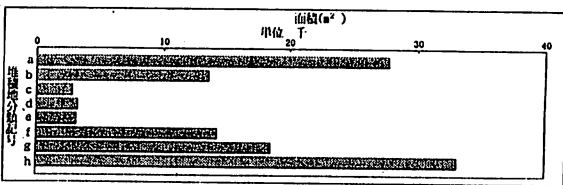
形成年代別の堆積地の平均比高と総面積・総体積は第6, 7, 8図で示した。ここで総面積・総体積とは、それぞれ単位区間あたりに存在する個々の堆積地の面積、体積を年代ごとに合計したものである。ここでは堆積地の面積、体積に関する年代分布に特徴が存在するかを明らかにすることが目的である。

形成年代別堆積地比高は、形成年代が新しいものほど低く、より古いものほど高くなる傾向を示している。b堆積地からh堆積地へのカーブからa堆積地のみが外れているのは、a堆積地に土石流によるものではなく、出水による砂礫堆積地が含まれているためである。砂礫堆積地は、土石流によって形成された堆積地よりも比高が低いため、形成年代別として平均比高を示すと砂礫堆積地を含むa堆積地が極端に低くなるのである。形成年代別堆積地合計面積は、年代の変化による秩

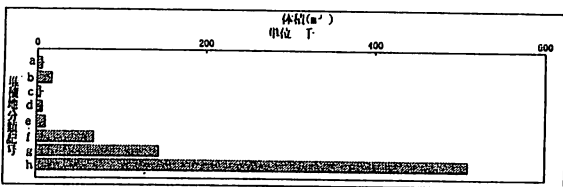
序だった変化は示していない。a, h堆積地が突出して大きく、b, f, g堆積地が平均面積（平均面積=11450.2㎡）よりやや大きく、c, d, e堆積地が最も小さいグループに属している。それに対して形成年代別堆積地総体積は、c堆積地からe堆積地にかけて徐々に大きくなっていき、f堆積地からh堆積地にかけて体積が大幅に増大している。h堆積地が突出する形は比高のグラフにおける傾向と似ている。



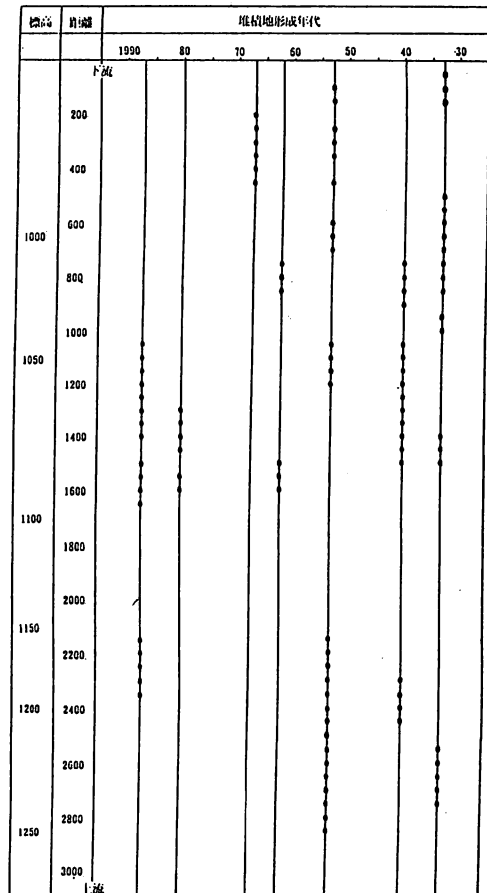
第6図 形成年代別堆積地比高



第7図 形成年代別堆積地総面積



第8図 形成年代別堆積地総体積



第9図 土石移動過程

5. 土石移動過程

先に示した形成年代別堆積地分布図は、各堆積地という『点』における形成年代、土石移動年代である。ここで、各点を結び水系として距離的に図化し、過去の一時点から現在の一時点に至るまでの土石移動の変化、つまり土石移動過程として示したものが第9図である。この図は、蒲田川との合流点から50m間隔に引かれた直線上に、どの年代の堆積地が出現するかを示したものである。最も新しい堆積地であるa堆積地は、土石流ではなく出水によって形成された砂礫堆積地も含まれているので、土石移動過程からは除外した。

最上位堆積地であるh堆積地は、上流部の2850m地点から最下流部の50m地点まで、ほぼ全流域に出現している。1940年に形成されたg堆積地は2450m地点から750m地点までの堆積で、h堆積地より短い距離にわたって堆積している。f堆積地は最上流部の2850m地点からほぼ最下流部の100m地点まで、a～hまでの全堆積地中で最も長い距離にわたって堆積している。e堆積地は中流部と下流部の二箇所、いずれも100mというごく短い出現である。d堆積地はe堆積地よりもさらに短く、下流部の450m地点から200m地点までにのみ堆積しており、他での堆積は見られない。c堆積地も距離が短く、中流部の1600m地点から1300m地点までの出現である。b堆積地は1650m地点から1050m地点までの堆積である。以上のように土石移動に参加した区間が各年代によって異なっていることがわかる。

堆積地の出現を見ると、h堆積地の850mから950m地点の間により新しいg堆積地が出現するといったような、より古い年代の堆積地と堆積地の間に新しい年代の堆積地が出現している地点と、同一地点への再堆積が行われている区間がみられる。

VI. 考察

1. 足洗谷における河床堆積地分布の

空間的・時間的特徴

第5図の谷幅変化と土石堆積量の関係から分かるように、谷幅と土石堆積量の変化は非常に良く対応している。したがって、堆積地の大きさは谷幅の広さによって支配されており、より谷幅の広い氾濫原を有する河道に、より大量の土石が堆積しているといえる。図から足洗谷での谷幅の大きさと堆積土石量との関係を捕らえると、曲流部区間や拡幅部区間では比高が高く年代の古い堆積地が存在し、狭く部区間においては比高が低く年代も新しい堆積地が存在する。このことから、流路拡幅部においては堆積した土石が保存され、流路狭く部においては土石流発生当時堆積した土石は、その後の河川の侵食作用によって侵食され、消滅するものと考えられる。一般的に谷幅の減少とともに、形成年代が古い堆積地が減少する。これは谷幅の減少にともない、谷幅全体に占める流水幅が増大するためであると考えられる。したがって、より狭い谷幅区間に形成された堆積地は容易に出水によって侵食され、形状の変化や堆積地そのものの消失といった移動をする可能性が高い。それに対して曲流部や拡幅部などの谷幅の広い区間において形成された堆積地は出水がおこっても、堆積地全体が移動するようなことは起こりにくいとされる。したがって曲流部や拡幅部においては、主として比較的形成年代が古い堆積地が存在し、狭く部には、比較的 formation 年代が新しい堆積地が存在するのである。

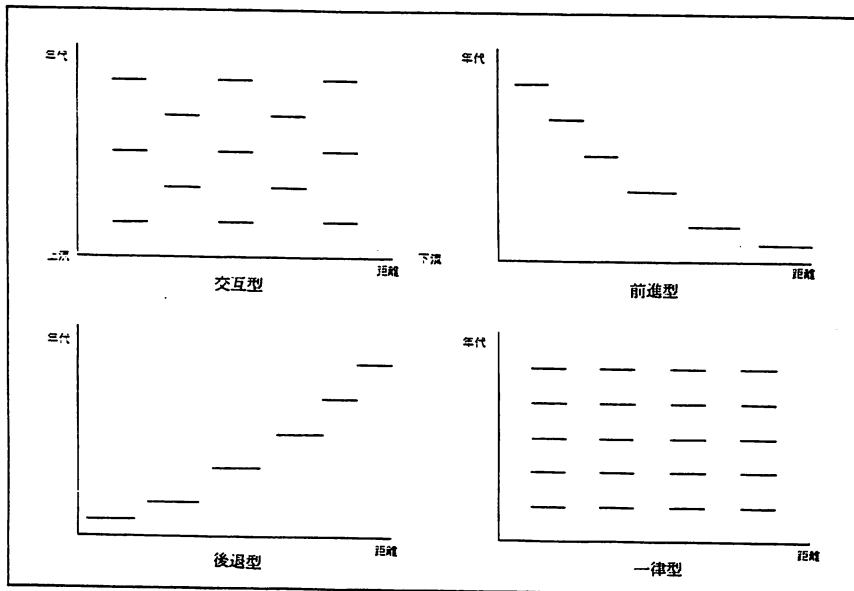
堆積地の比高は、形成年代が古いものほど高くなるという結果が得られた。この原因として一つには、より大規模な河床変動、つまり土石流によってそれまでに形成されていた小規模な堆積地が埋積、消滅するためであると考えられる。よって、

年代的に大規模な変動によって形成された堆積地から順に残ることになる。原因のもう一つは、より古い堆積地ほど、過去にたびたび土石流による土石の再堆積をうけており、再堆積が積み重なって現在の比高が高くなっているものと考えられる。

堆積地上の木本に土石の衝突痕が見られない場合、その成育する堆積地は、より高い土石流の流下をうけていないものである。足洗谷の堆積地上のケヤマハンノキには、外観的に土石衝突痕が a 堆積地の一部以外は見られなかった。したがって堆積地の年代は足洗谷における土石流の発生年間隔を示すものとしてみることができる。h 堆積地は形成後62年を経ているが、その間に堆積比高15.4mをこえる土石流は発生しなかったことになる。g 堆積地は55年間、f 堆積地は42年間、e 堆積地は33年間、d 堆積地は28年間、c 堆積地は15年間、b 堆積地は8年間、a 堆積地は3年間それぞれの比高を越す土石流が起らなかったことを示している。このことから発生年代をもとに考え

ると、h 堆積地を基準として、g 堆積地の比高程度の土石流が発生する確率は h 堆積地の約1.1倍、以下同様に、f 堆積地は約1.5倍、e 堆積地は約1.9倍、d 堆積地は約2.2倍、c 堆積地は約4.1倍、b 堆積地は約7.8倍、a 堆積地は約20.7倍になる。このことから、より下位にある堆積地ほど土石流の流下を受けやすいことが分かる。

上位堆積地が形成され、さらに下位堆積地が形成された時点で上位堆積地の比高を越える土石流が発生すると、それまでに形成された堆積地は埋積され、以前形成された上位・下位二段形成されていた堆積地は新しい一つの堆積地となる。このことから堆積地は上位堆積地になるほどその面積は大きくなると考えられる。e 堆積地が d 堆積地よりわずかに小さいものの、c 堆積地より上位の堆積地は年代の大きいものほど面積が大きくなる傾向を示している。しかし、年代の新しい a, b 堆積地の面積が h 堆積地に続いて広いのは、a 堆積地に出水による砂礫堆積地を含んでいること以



第10図 土石移動形態のモデル

新谷 (1972) に加筆

外にも原因が考えられる。a, b 堆積地が河床で面積を広く占めている場所は、砂防ダム上流の堆砂池部分である。現地調査時に足洗谷の砂防ダムはすべて満砂の状態にあった。砂防ダムは満砂の状態では、元の河床勾配の $1/2 \sim 1/3$ の勾配で堆砂する（神通砂防資料館）ので、a, b 堆積地は元の河床勾配に比べて緩やかな部分に、そのほとんどが堆積しているのである。もし砂防ダムがなかったならば、a, b 堆積地は、より堆積幅が狭く、合計面積は小さくなっていったと考えられる。また、砂防ダムが建設され、堆砂がおこなわれたことによって堆砂池に埋積された堆積地があったと考えられる。各年代別の堆積地面積をみると、埋積された堆積地は f ~ h 堆積地の面積の増大傾向から考えて c ~ e 堆積地であろうと推測される。

2. 足洗谷の土石移動過程

土石移動のタイプを第10図に示した。土石移動は新谷（1972）によると、基本的に交互型・前進型・後退型・一律型の4種類に分類されるとしている。

新谷はこれらの種々のタイプが同一流域内に含まれているとしているが、新谷が調査をおこなったのは、足洗谷よりも流下する距離が長い河川であるので、この考えは足洗谷においては適用することができない。これら土石移動形態の違いは、各河川・各地域の特徴、つまり個性の違いによってあらわれるものである。

第9図の土石移動過程を見ると足洗谷の土石移動タイプは前進型や後退型ではないことは一目瞭然である。したがって、移動タイプは交互型か一律型かである。足洗谷の土石移動タイプが交互型か一律型か確かめるため、次の方法で検証した。h 堆積地と g 堆積地、g 堆積地と f 堆積地といった、各堆積年代が隣接する堆積地について、再堆積がおこなわれている一律型の区間の距離と、再

堆積がおこなわれず、交互に堆積がおこなわれている交互型の区間の距離を比較した。その結果、再堆積がおこなわれている一律型の距離は合計650mであったのに対して、再堆積がおこなわれず、交互に堆積がおこなわれている交互型の区間は合計2100mであった。このことから足洗谷は、一部に再堆積がおこなわれている一律型の区間があるものの、全体としては交互型であるといえる。

Ⅶ. まとめ

本研究で筆者は、岐阜県北部飛騨地方、吉城郡上宝村の神通川支流蒲田川の一流、足洗谷を調査し、河床堆積地の分布の特徴を捕らえ、堆積地の空間的・時間的分布と、その移動過程を明らかにすることを目的に研究を行った。そして考察の結果、以下のことがわかった。

- ①. 河床堆積地は谷幅の低下にともなって、堆積地の比高・面積・体積が低下する。
- ②. したがって、狭さく部区間に形成された堆積地は、出水によって容易に冠水し堆積地の大幅な変形や、堆積地そのものが消滅してしまう可能性が高い。
- ③. しかし、拡幅部区間に形成された堆積地は出水が起こっても変形や、消滅する可能性が低い。
- ④. 土石流による過去の再堆積の関係から、各年代別比高・合計面積・体積ともに、形成年代が古くなるほど大きくなる傾向にある。
- ⑤. 足洗谷の土石移動過程を新谷（1972）の4タイプに当てはめた結果、ほぼ交互型に当てはまることがわかった。
- ④. については、砂防ダムが河床を塞ぎ止めていることや、河床勾配を緩やかにする機能によって、グラフが a, b 堆積地において乱れていることが推測された。さらに⑤. については下流側約3 kmのみの調査で、労力上足洗谷の全流域にわたっ

て調査を行えなかったので、中途半端なものになってしまったように思う。

参考文献

- 東 三郎 (1967) : 地表変動と指標植物. 水利科学, 56, 55-68.
- 笹賀一郎 (1979) : 扇状堆積地の土砂害防止に関する基礎的研究. 北海道大学農学部演習林研究報告, 36(2), 317-386.
- 新谷 融 (1968) : 荒廃溪流における土石移動の痕跡. 新砂防, 21(1), 19-26.
- 新谷 融 (1971) : 荒廃溪流における土石移動に関する基礎的研究. 北海道大学農学部演習林研究報告, 28(2), 193-258.
- 新谷 融 (1972) : 溪床土石の移動過程調査の方法. 新砂防, 24(4), 6-13.
- 諏訪浩・志方隆司・奥田節夫 (1985) : 焼岳上々堀沢の地形変化過程. 新砂防, 37(5), 14-23
- 辻井達一 (1995) : 日本の樹木. 中公新書, 81-8.
- 中村太士 (1988) : 河川の動態解析に関する砂防学的研究. 北海道大学農学部演習林研究報告, 45(2), 301-369.
- 中村太士 (1990) : 河床堆積地の時間的・空間的分布に関する考察. 日本林学会誌, 72(2), 99-108.
- 藤井昭二・武沢正・沢田豊明 (1970) : 河岸段丘と年輪. 新砂防, 23(2), 6-10.
- 真坂秀二 (1988) : 破碎帯流域における荒廃溪流の動態に関する砂防学的研究. 筑波大学演習林研究報告, 4, 21-120.
- 吉川虎雄・杉村新・貝塚爽平・太田陽子・阪口豊 (1973) : 新編日本地形論. 東京大学出版会, 76-89.

民俗事象への多面的アプローチの試み

— 東京都武蔵村山市・岸の粉食を例に —

茂木 真佐美

I. はじめに

1. 麦作の周辺

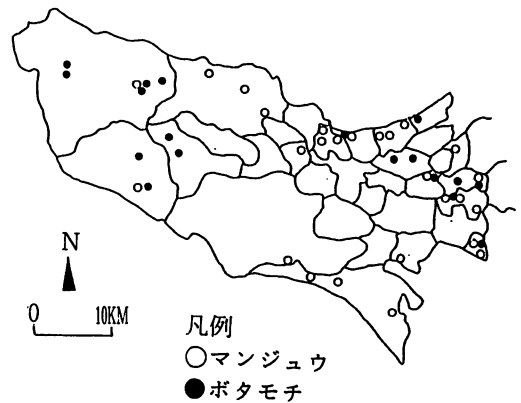
狭山丘陵南縁に位置する東京都武蔵村山市・岸は、地下水脈が低いこともあって、水稻よりも小麦が盛んに作られてきた。年中行事には麦の要素が色濃く残っており、小麦粉を用いた食製品が発達している。従来の研究は、民俗学や地理学といった細分化された体系の中で、それぞれ独自の手法を用いて、分析を試みたものが多かった。だが、人々の生活や文化は、一元的なものの方では実態が掴みにくい面もあり、従来の既定の質問項目に沿った調査方法では網羅できない部分もある。ここでは、柔軟な発想で小麦食を中心に、民俗事象の記述の可能性を提示する。

方法としては、既存の文献をもとに質問項目を作成し、聞き取りを行う。年中行事の概要とそれに伴う行事食の実態を明らかにしていく。特に麦作に関連があると思われる事例については検討を加える。詳しい個々の事例の記述においては割愛し、ここでは地域文化としての民俗に多角的に取り組み、それを通じて地域のアイデンティティーについて考察することを目的とする。

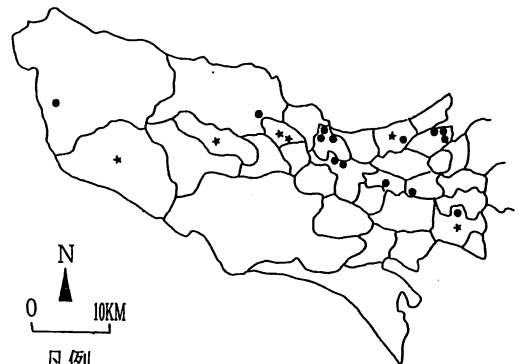
2. 多摩地域の中での位置づけ

民俗誌・市町村誌をもとに、事例の記述が見られる地点を地図上に落としたのが第1、2図である。第1図は月見の供物、第2図は正月のウドン食の分布を表しており、武蔵村山市に顕著な事例

を選んで多摩地域の中での位置付けを試みた。第1図ではボタモチが東部および西部にみられる。ボタモチは黍で作られたという事例も報告されている(保谷市, 1986)。よって西部のボタモチは雑穀文化の名残である可能性がある。マンジュウ



第1図 多摩地域の月見の供物



第2図 正月にウドンを食べる地域

茂木 真佐美 本学地理学専攻 1996年3月卒業, 神奈川大学大学院 歴史民俗資料学専攻

は中心部を除くほぼ全域に分布しており、畑作地域・第2図の正月のウドン食の地域と一致する。小麦作りが盛んであったことが伺える。地形を考慮すると、中心部は多摩川沿いの水利が良い水田地帯である。多摩の他地域に比べ、米に充足していた為に供物に団子を作る余裕があったことが考えられる。マークのない地域では、ダンゴを月に供える。

正月の麵食は長野県、山梨県でも見られる(安室, 1991; 長沢, 1992)。ここでは食生活の構造や年中行事ではなく地域的な事柄なのであえて触れないでおく。多摩地区の民俗誌からはあまり事例が抽出できないが、これには調査者の餅に対する固定観念を考慮する必要があるのではないか。武蔵村山で行った調査ではほとんどの話者が正月に

ウドンを食べると言っている。これが武蔵武蔵村山市のみの特殊な事例であると断定することはできない。

ドジョウガユという麦まきじまいの儀礼は、多摩・埼玉・群馬にまたがってベルト状に分布がみられる。そのおよそ中心に武蔵村山市は位置している(長沢, 1989)。ここに、食い節供など麦の要素を多分に持つ行事がみられるのも、特異ではない。

3. 麦作をめぐる行事

ここでは武蔵村山市における麦作の要素のある行事の概要を述べていく。年中行事は一年を四つに分けて正月・春と夏・盆・秋と冬で区分される。これらは主に、岸地区の聞き取りをもとにしたも

農事暦		14~15夏祭り*		☆	
月日	行事名		7 7	七夕*	●★
1228~30	餅つき	□	13~16	盆*	△●★
31	大晦日	○●	下旬	夏上がり*	●★
1 1	元旦	◎□●		八朔の節供*	★
31	正月料理	○●	上旬	三日正月	●★
1~15	オヒマチ	●	15	十五夜*	▽★
1~31	新年会	●	上旬	二百十日	○●★
7	七草	◎	9 13	十三夜*	▽★
11	蔵開き	◎	15	秋祭*	☆●★
14~16	小正月	□▽◆	彼岸日	秋彼岸	◎△▽★
15	オシラ講	●	30	お盆様	▽
16	藪入り	★	10 9	亥の子*	△
20	恵比寿講	☆●	10	十日夜*	△
2 11	初午	☆	中旬	ドジョウ粥*	◇●
節分日	年取り	○	下旬	秋あがり*	★
3 3	糺祭	◎□	20	恵比寿講	☆●
4	阿豆佐美天春祭*	★	11 15	オビトキ	☆□
15	梅若	▽★	上旬	穴っぶさげ*	◇□●
彼岸日	春彼岸	◎△▽★	12 冬至日	冬至	○
4 8	お釈迦様	□	中旬	忘年会	●
15	春祭	★	*麦作儀礼的要素を持つ行事		
5 5	五月節供*	☆◇★	年中行事のうちハレの日の食事をとるもののみをまとめた。		
上旬	オヒマチ	●	凡例		
下旬	ホイロじまい	□●★	○米飯 ☆赤飯 ◇カテ飯 ◎粥 □餅 △ポタモチ▽ダンゴ		
6 5	食い節供*	◇★	●ウドン ★マンジュウ ◆蕎麦 (小麦粉)		
中旬	麦刈り祝い*	●★			
中旬	鎌洗い*	●★			

第3図 武蔵村山市岸市地区年中行事

のである。厳密に麦作をめぐる行事について、定義することは困難であるので、ここでは麦作に関係の強い事例という観点で抽出を行った。簡単な麦の生業暦と行事を簡単に示したのが第3図である。

正月の行事は準備段階から始まるが、まず麦が出てくるのは大晦日である。「盆暮れ勘定」といって借金の返済はこの日に行ったが、物納(小麦粉)のこともあった。晦日蕎麦のかわりにウドンを食べる家もある。正月料理にもウドンを作り、三が日のうちに必ず食べる。小正月にはアボヒボ(粟穂稗穂)を作る。これは収穫される雑穀の形になぞらえて作るので、一般に畑作物の予祝の要素があるとされている。この日は繭玉という繭の形になぞらえた団子も作って祝うが、この団子が小麦粉で作られることもある。正月中労働に追われた女性が休めるのはオシラ講と呼ばれるクミの集まりであり、ウドンで会食をする。繭玉を外すのは1月16日である。

春・夏の行事からは、麦の要素が強い行事が増えてくる。クミで行われるオヒマチという講では、ウドンで共同飲食を行った。5月5日に行われる五月節供では柏餅を作り、ほとんどは米の粉の皮であるが、小麦粉の皮を作る家もある。この一ヵ月後に、食い節供と呼ばれる武蔵村山市特有の行事があり、柏餅を作る。農繁期ということもあり、行事内容は食べるのみである。季節と行事の趣旨から、小麦の収穫儀礼の要素が感じられる。須賀神社の夏祭りはテンノウサマと呼ばれる。子供達は大人の担ぐものをまねて麦藁で御輿を作り遊んだ。夏祭りは、一般に稲の予祝儀礼としての見方があるが、ここでは麦の収穫儀礼の印象があることも否めない。麦刈りが行われるのは6月中旬であるが、その後鎌洗いという行事があり、ウドンを神前に供える。

盆の行事の中には、七夕も含まれる。この日も

マンジュウやウドンを作って供える。この頃は小麦の乾燥に忙しい。梅雨の時期であり、晴れ間に作業が集中する。盆の食事はウドン・ソーメン・ウデマンジュウなど小麦製品が多い。送り迎えには麦藁を束ねた松明を用い、盆礼はソーメンを多く用いる。盆が終わると嫁は里帰りが許されるが、酒マンジュウを手土産にする。

秋の行事には十五夜・十三夜があり、マンジュウを供える。亥の子は11月3日であり、この日までに麦播きを済ませる。麦播きじまいの祝いには、ドジョウ粥と呼ばれる粥の中にひもかわ状に切ったウドンの入った儀礼食を作る。麦播きが終わると嫁は里帰りするのは夏の場合と同様である。

以上麦作および小麦食を中心に年中行事を羅列してきた。全体的に麦作に関する儀礼・小麦を用いた儀礼食は春から秋に集中する傾向がある。それらの行事の中におけるウドンの重要性はかなり高い。麦の儀礼といっても、本来は稲作儀礼でありながらそれが麦作の作業のプロセスの目安となっている亥の子があったり、麦製品の儀礼食を作ることによって、意味が新たに加わってきた五月節供などと多様である。岸の人々は自分たちの風土に根差した生活を連綿と続けてきたのであり、今日もその片鱗を彷彿することができる。

4. 儀礼食と行事

黒いマークは麦製品、白抜きのものは米を原料とする食品である。麦製品儀礼食の重要性が米と同等、もしくはそれ以上であることが読み取れる。

これらは、米を中心に儀礼食に用いる時期と、麦製品を中心に食べる期間に分かれている。多少のずれはあるものの、春から秋にかけては小麦、秋から冬にかけては米が中心という受けとり方も可能である。生産暦を考慮すると米は収穫時期が10月上旬であり、小麦の場合は6月中旬である。生産されてすぐ食べている可能性もある。

農作業が集中するのは主に春から秋にかけてであり、儀礼食に小麦が出現する期間と一致する。麦製品と米製品を作るプロセスは次章で詳しく述べるが、多くの米製品は浸水・餡を作るなど下準備に手間がかかるものが多く、一日以上を要する。ウドンやウデマンジュウなどは、寝かせる時間を含めても半日あれば完成するものが多い。マンジュウは、餅のような人手を必要としない。農繁期に麦製品を多く食べるということに関して、作業効率の影響も多少は考えられる。

6月5日に行われる食い節供は武蔵村山市のみ聞かれる行事であり、ドジョウ粥などは関東の埼玉南部および多摩の畑作地域独特のものである。麦製品を儀礼食としている行事が、この地域における行事の特徴の一つである。

ハレの日の食事の内容にみられるこのような季節的パターンは年中行事暦や一年の生活リズムにアクセントをつけ、より多彩なものとするために重要な役割を果たしてきたものと考えられるとされる(長沢, 1993)。年中行事の構造については次章に譲るが、毎年繰り返される行事と、一生の中の人生儀礼とが複雑に絡み合いながら人々の生活を形作ってきたのではないだろうか。

II. 年中行事の分析

1. 年中行事の構造

年中行事は時代とともに変わるものもあるが、表面は変容しながらも古くから続いているものもあり、また基底に不変に流れている思考や論理というべきものもある(福田・宮田(編), 1983)ということがいわれている。武蔵村山市の場合、「東京盆」や「岸の盆」といった言葉と関係がありそうな気はする。すなわち行政上は東京都であっても、自分たちは「村山」の人間であるという自意識がありそれが未だに続く盆の日取りのずれに

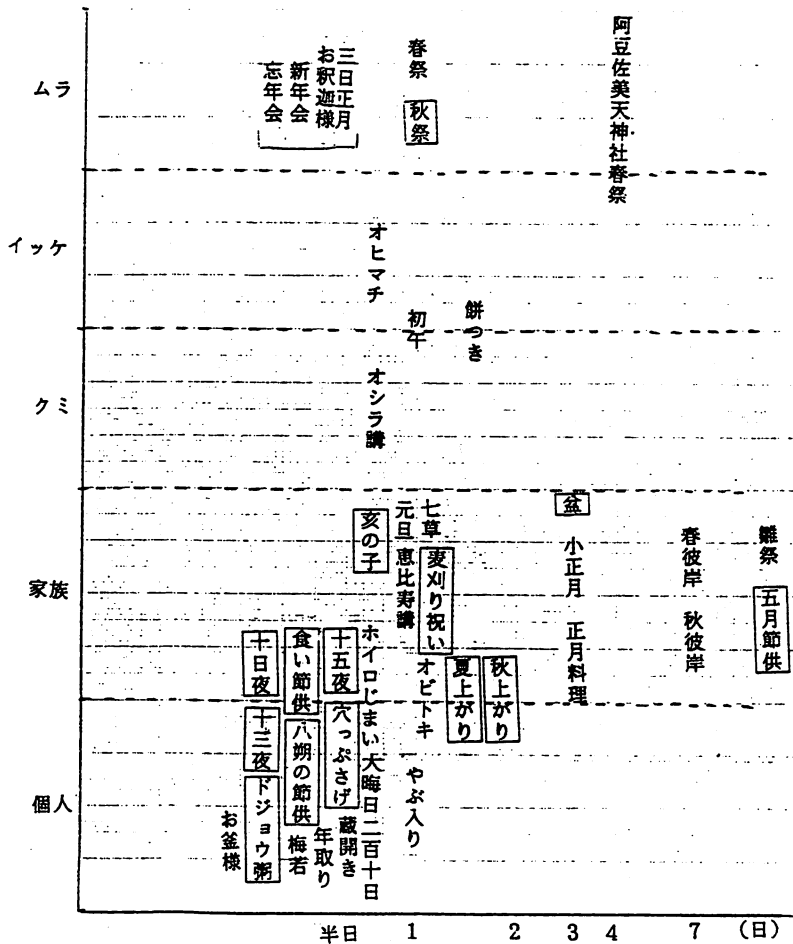
現れているのではないかと考えた。かつては養蚕の関係で盆の日取りがスライドしていた時期もあった。現在では多くの場合、企業の製造機械の作業効率から休日(盆休み)がまとめられている、との話も聞く。最近では、表層文化・基層文化の線引き自体についても、疑問視されており、そのこと自体意味があるのかということも再考の余地がある。

人々の生活を知る上での計量化は、時間地理学分野で櫛谷(1985)らによって行われている。高橋(1987)も日本の生活空間ということで農家の生活のモデル化をおこなっている。その中で生活組織の階層構造を図化しているが、現代を対象としたものであるため民俗学の社会構成の要素が加味されていない。櫛谷は計量化を用いて漁師の生活の体系化を試みたが、ここでは民俗的行事を時間・手間という側面から、図化した(第4図)。これから、麦作に関係のある行事が左下、すなわち家族または個人単位でしかも短期間に行われる印象を受ける。農繁期には、これらの行事が集中する。年中行事を考えるのに階層構造の点からも考察が必要である。

2. 食製品の構造

武蔵村山市において麦作が盛んなことは前に述べたが、ここではケの食事すなわち日常の食生活における麦との関わりについて触れる。ハレ・ケを通じて良く食べられているのがウドンであり、武蔵村山の民俗を述べるにあたり、有効な切り口である。多摩の他地域における畑作地域の食生活の研究は、宮本ら(1978)によるものが詳しい。

米を食べられるのは正月くらいなものでそれも陸稲であったという。これが良くできるのは3年に1度位で、出来の悪い年はシイナツブのようになってしまい実の入らないこともあり、早くに刈ってしまう年もあった。秋には薩摩芋も作った



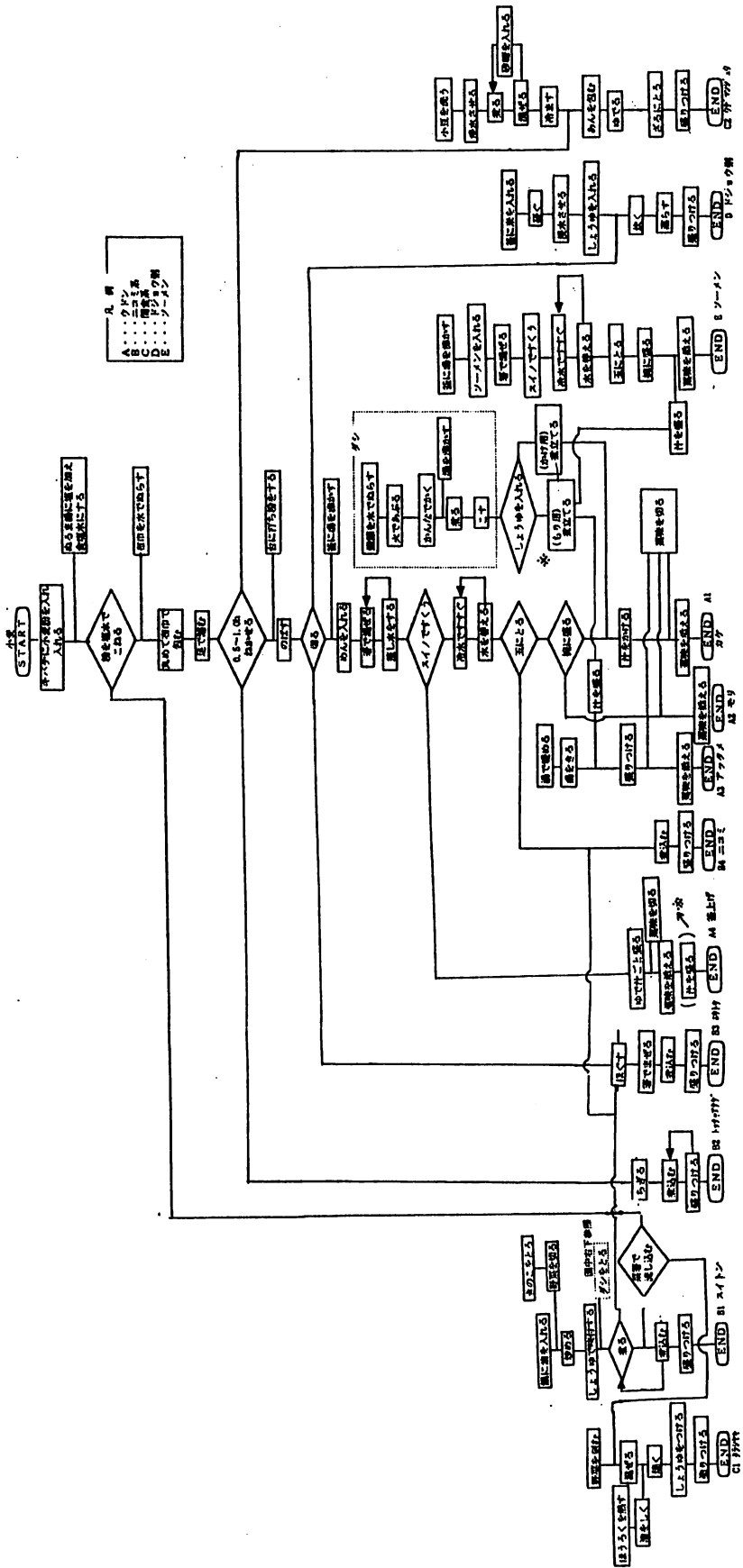
第4図 時間・社会構造から見た年中行事

- 注) 1 五月節句・雛祭りは人形を飾る期間。
 2 全ての行事は準備期間を含むものとする。
 3 盆は七夕を含まない。

が、これも「なるべく米を食べないための工夫」と話者は言う。

第5図はウドンの調理プロセスを図化したものである。同じウドンでもハレの日に用いられる場合と日常食として食べられる場合がある。言い切ることにはできないが、ハレの食事は手を加えない、すなわち野菜などを混ぜない調理法である。儀礼食は神聖さを伴う簡素な形、日常食は見てくれよりも栄養を重視している傾向がある。

第6図は糯米であるが、ポタモチ・モチ・赤飯の3グループがあり、応用範囲はさほど広くない。餅ではそのまま食べるジゼイモチ(自在餅)の中には大根おろしをからめるカラミモチ・あんをつけて食べるアッコロモチがあり、一般的なノシモチ・オソナイ・カキモチ・アラレに分かれる。厳密に言えばこれらは陸稲の米を用いるのであり、餅には黍や粟を混ぜたものであるがここでは便宜上単純化して表記した。



第5図 小麦食の調理プロセス

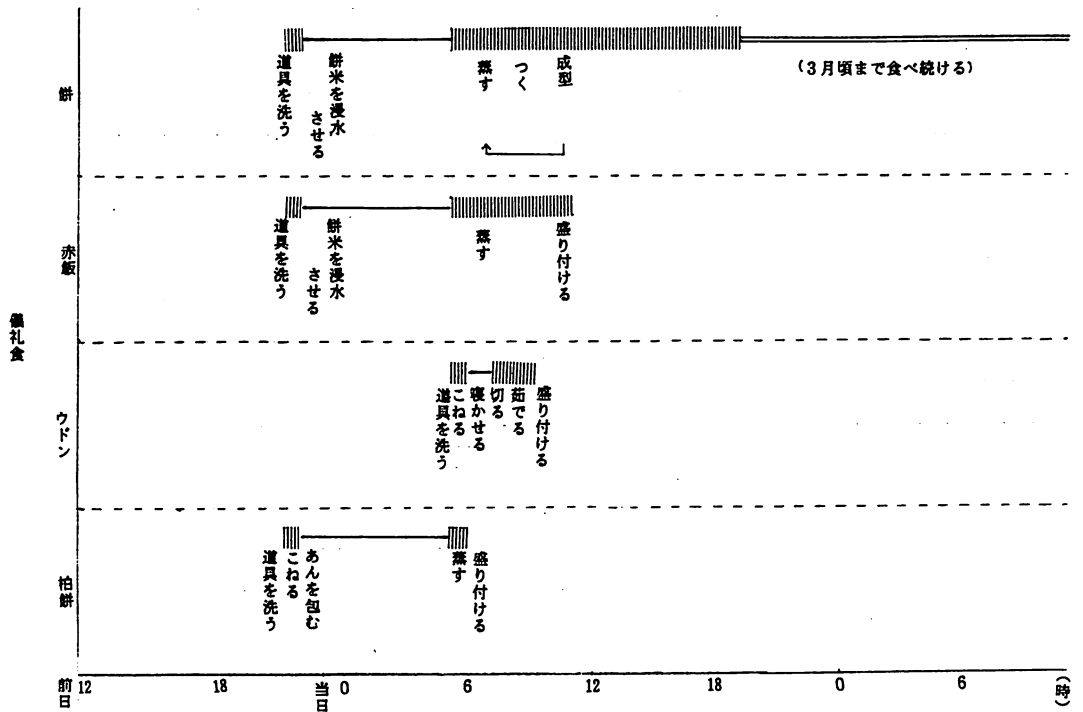
米は出来上がる食品が大きくグループで分かれ、
 その中で分岐する横長の構造をとるのに対して、
 小麦では段階毎に分かれ作業の違いで全く異なっ
 た食製品ができる縦長の構造をとっている。単純
 に考えれば小麦のほうが応用範囲が広く飽きにく
 いということがいえる。武蔵村山市でこれだけ小
 麦食が発達をみたのは特記すべきことである。

第5, 6図から主要なものを抽出し、時間軸を
 重ねたのが第7図である。農閑期である年末から
 早春にかけては儀礼食として米が多く用いられ、
 反対に農繁期ではウドンが多くみられるのは先に
 述べた。同時に手間の問題を仮定したが、その可
 能性の裏付けとしてこのことがあげられる。季節

的に腐りやすいなどの理由もあろうが、食製品の
 構造として冬場のは製造に時間を掛け、かつ
 長く食べ続ける。夏場はその反対であり、儀礼そ
 のものにかかる時間も短くなっている。このよう
 に従来の年中行事には、様々な形成要因が考えら
 れる。食生活においても単純に麦が収穫され、米
 の生産高が低いという背景のみで決定することは
 困難である。

III. 結語

このようにして、ウドンを中心に武蔵村山市に
 おける麦作の様子を総覧した。聞き取りをもとに



第7図 時間から見た調理プロセス

行事を羅列し、麦の要素が強い年中行事の性格が明らかになった。平面的に多摩地域を概観し、その中で武蔵村山の姿を考察した。これを儀礼食に絞り構成要素を分解し抽出することによって、農繁期と農閑期のリズムと儀礼食の関係が浮かび上がって来た。さらに時間という面から裏付けを行い、年中行事・食生活への分析を加えた。

こうして麦という作物が風土と密接に関わりながら、人々の生活に影響を与えてきた一面が明らかになった。これは食生活の面からも伺えるが、個々の行事からも顕著に見られる。東京近郊にありながら、麦の色合いが強い独自の文化が、戦後まで伝わってきたことには理由があろう。今後は、過去の行事を如実に復元するだけにとどまらず、核家族化の進行や、女性の社会進出という要素によりどう行事が変化していくかということも、考慮されるべきである。

一般に年中行事というと、毎年同じことの繰り返しのような印象を受けがちである。実際は人生儀礼と絡み合いながら、螺旋状の時間を描いている。個人という視点ではそうなるが、社会全体に主眼を置くと事実の見え方は異なる。さらに淘汰という要素も加味される。従来の人間活動研究において、主にマクロの視点が強調されてきた印象がある。短いタイムスパンを基準とすることにより違った側面が見えてくるのではないか。

行事の中には亥の子のようになくなったものもあれば、餅つきや盆のようにいまだに行われているものもある。孫が小さくて行事を喜ぶうちは熱心に行うが、成長して関心が薄れるにつれてなおざりになる、という。淘汰には生業形態の変化の他に、生活構造の変化によるマスコミの影響も感じられる。これを地方の均質化ということに短絡的に結び付けてしまうには危険性がある。盆を例にとれば、地区外に居住しており、墓地のみ所有している人々は東京盆の日に墓参りにやってくる。

地区内の人は村山盆の日に墓参りをする。テレビなどで騒がれる行事は行われており、地域色のあるものは年配者以外は行わなくなってきている事例もある。今後は行事そのものにとらえかたについても、再考する必要が感じられる。

高橋(1987)は「生活空間の研究は、今後、ますます学際的になるであろう」と述べている。人間の生活を民俗学の八項目という限定された視点でとらえることは、無理がある。民俗学が地理学の方法論に学ぶべきものは少なくない。だが地理学には、人間を1つのデータとして扱い、無味乾燥なパターンに置き換えてしまうという性格がある。人間そのものに焦点を当てていく民俗学の意義は、そこにあるであろう。お互いが補完し合うことにより、新たな可能性が見えはしないだろうか。

参考文献

- 安室 知(1991): 餅なし正月・再考－複合生業論の試み. 日本民俗学, 188, 49-87.
- 榎谷圭司(1985): 時間地理学 (Time-geography) の内房漁師の行動選択への解釈の応用. 地理学評論, 58, 645-662.
- 高橋伸夫(1987): 日本の生活空間にみられる時間空間行動に関する一考察. 人文地理, 39, 295-318.
- 長沢利明(1988): ネズフタギと関東の麦まきじまい行事. 多摩の年中行事, 町田市立博物館, 39-90.
- 長沢利明(1993): 年中行事と食生活－埼玉県戸田市美女木・下笹目一. 埼玉民俗, 18, 58-78.
- 長沢利明(1992): 山梨県における正月の麵食. 民俗, 114, 1-2.
- 福田アジオ・宮田登編(1983): 日本民俗学概論. 吉川弘文館.

保谷市 (1986) : 下保谷の民俗. 保谷市.

宮本常一・潮田鉄雄 (1978) : シリーズ食文化の
発見・食生活の構造. 柴田書店.

1995 年度 国士館大学地理学専攻 卒業論文題目一覧

- 2 国分 倫子 首都近郊都市における高齢化の地域的パターン = 藤沢市を事例として =
- 3 関川 幸浩 福島県から茨城県の太平洋沿岸における気温と海面水温との相互作用について
= 特に夏の異常気象年について =
- 4 齋藤 康広 人口増加に伴う市街地周辺の土地利用変化について = 千葉県八街市 =
- 5 太田 昇 植生区分の異なる地点における湿原の花粉分析からみた植生変遷の違い
= 上信越国立公園西側を例に =
- 6 関 さおり 都市が気象官署に与える影響について = 仙台市を例に =
- 7 泉 大樹 札幌市のヒートアイランドについて
- 8 生出 大輔 文学作品にみる『人間』と『場所』の関係 = 夏目漱石と鎌倉を例として =
- 10 有坂佳代子 ゴミ処理の歴史にみるごみ急増の実態と課題 = 東京都 23 区を例に =
- 11 藤崎 俊明 大学生の日常生活における余暇活動について
= 競馬に関する余暇活動を中心として =
- 12 中村 隆司 土地利用の違いが河川の降雨流出に与える影響
= 神奈川県城山町の境川水系を例に =
- 13 上原 朋之 東京都豊島区におけるコンビニエンスストアの立地展開
- 15 中林 豪 農地転用がもたらす都市近郊農業の衰退
- 16 東風谷 孝 江戸川河川敷の利用形態から見た右岸・左岸の植生の違いについて
- 17 飯泉 齋志 東京近郊都市における駐車場立地と駐車空間の変容 = 八王子・町田を例として =
- 18 増田 直文 長野県におけるスキー場立地の現状
- 19 祖父江亜紀 千葉県富津岬における人工構造物の影響による海浜変形
- 21 白男川里子 衛星リモートセンシングに基づく斜面崩壊地の検出
= 1993年8月鹿児島豪雨災害を例に =
- 22 小林美佐子 植生自然度による土地被覆変化の抽出
= リモートセンシングを利用した茨城県南東部の解析 =
- 23 青木 美和 長野県犀川流域の地すべり地形の特徴と地質との関係
- 28 伊佐 孝史 石垣島轟川流域における農業整備産業と振興開発について
- 29 宮田 幸則 明治中期から昭和期における地方鉄道事業の形成
= 愛知県尾西鉄道豊川鉄道の事例 =
- 30 西 剛 印旛沼流域市町村の行政と水環境の違いについて = 印旛沼水質汚濁の浄化対策 =
- 31 鎌田 貴広 千葉県和田町における花卉栽培
- 32 吉野 幸広 都市河川における多目的遊水池の役割 = 埼玉県大宮市深作川の事例 =
- 34 吉川 俊成 リゾート開発地における緑地保全政策 = 三重県鳥羽市を事例として =
- 36 村上 誠 神奈川県藤沢市におけるコンビニエンス・ストアの立地展開
- 37 金井 勇次 関東地方における降水量の長期変化について

- 40 草間 裕輔 多摩ニュータウン開発を背景とした多摩市の住宅事情
- 41 田上修太郎 栃木県におけるイチゴ産地の販売組織と市場対応 =二宮町を中心として=
- 44 杉下 創史 市街地に隣接する小起伏地における夜間の気温特性
=埼玉県所沢市西武鉄道狭山線沿線を例に=
- 45 田中 憲一 茨城県神栖町における大気汚染の気候学的考察
- 46 法本 洋司 神奈川県における緑地保全の現状
- 47 辰井 公二 千葉県八千代市の都市化による公園・緑地の推移
- 48 仲井 正和 都市におけるセメント産業の役割 =神奈川県と神奈川県相模原市を例に=
- 49 神保 隆幸 東京における震災対策の現状 =阪神大震災を踏まえて=
- 51 菊地 啓之 VTR画像のコンピュータ処理に基づくサンゴ礁地内の被覆率調査法について
- 57 村上 昌哉 東京都町田市におけるリサイクル活動の動向
- 58 浦野 雅宏 大宮市中心部における中高層建築物の立地過程とその機能
- 59 石井 崇伸 中学生の空間認知に影響を及ぼす要因
- 60 茂木 佳子 生活系ゴミの分別収集と再資源化 =市川市・船橋市・松戸市を例に=
- 61 西村 圭介 房総半島南部における照葉樹林構成種の分布と潮風環境
- 62 鈴木 一史 近世の渡船について =下総国取手の渡しを事例に=
- 63 佐々木勝己 プレジャーボートの普及と不法係留の現状について
=プレジャーハーバーの在り方を考える=
- 65 後藤 智哉 木曾山脈南部におけるササ草原
- 66 坂下 優一 荒川中流域における河床及び段丘堆積物の形状と堆積環境
- 67 小森谷聖高 新たな高速交通発達の中での地方空港のあり方 =山形空港を例として=
- 68 後藤 大樹 埼玉県における都市公園整備の現状 =街区公園を中心に=
- 69 村松 良幸 水害対策と破堤防災図の作成 =茨城県小貝川を事例に=
- 70 長島 功男 南岸低気圧がもたらす積雪の地域特性 =関東地方（東京と周辺地域）を例に=
- 72 乗上 智昭 神奈川県における観光業
- 73 窪木 俊夫 地形改変を伴う丘陵地の住宅地化 =横浜市北部を例として=
- 74 茂木真佐美 麦作儀礼と麦製品儀礼食 =東京都武蔵村山市岸=
- 75 横溝 豪 神奈川県秦野市水無川における水質汚濁の現状について
- 76 柳澤 一平 新潟県中頸城郡大潟町におけるニセアカシアの分布と植生景観の変遷について
- 77 網谷 貴博 東京都立石神井公園のクールアイランド現象について
- 78 小熊 将之 千葉県における霜に関する研究
- 79 榊原 清史 都市化地域における農業の組織化と農家経営
=神奈川県川崎市麻生区岡上宮農団地を事例として=
- 80 寺嶋 哲也 群馬県川場村における観光開発
- 81 中川 史渡 大規模観客施設周辺のヒートアイランド現象について
=三重県鈴鹿サーキットを例として=

- 82 山口 誠一 東京都江東区における水路・中小河川の利用形態の変化
- 83 長尾竜太郎 焼岳足洗谷における堆積土石の分布とその移動過程
- 84 村上 淳 販売にみられる新聞産業の実態 =東京都区部の場合=
- 85 杉原 清隆 首都圏におけるバス交通事情 =埼玉県浦和市を例に=
- 86 紺野 薫 青森県十和田市における野菜生産の成立と生産構造
=ながいも・にんにくを事例として=
- 701 白井 英明 親潮の異常南下が関東地方沿岸の気温に与える影響について
- 706 木沢 好史 栃木県におけるいちご生産について
- 707 山崎 智則 千葉県千葉市JR千葉駅周辺のヒートアイランド効果について
=千葉測候所への影響=
- 709 高砂 修 ミヤコタナゴ生息地域における環境変遷と現状 =神奈川県横浜市を例に=
- 711 西原 正樹 漂砂の減少に伴って生じた海岸侵食と侵食防止対策の効果
=京都府宮津市天橋立を例に=
- 712 井出 和明 駐車場空間の拡大に伴う鹿島市市街地および市街地周辺部における影響
- 714 谷 英樹 東京都世田谷区の環状8号線周辺の気温分布 =「環八雲」の研究=
- 717 奥津 秀 鹿島臨海工業地区の発展と周辺地域の変化

96年9月卒業

- 38 高倉志央里 公園における緑のリサイクルについて =都立公園を例に=

国士舘大学地理学報告 編集担当者

国士舘大学地理学会編集担当

指導教員：内田 順文

学 生：佐藤 愛 (2年) 増田 尚徳 (3年)

坂路 具嗣 (4年) 高橋 省吾 (1年)

加藤 譲 (1年)

国士舘大学地理学報告 No. 5

1997年2月 1日印刷

1997年2月10日発行

編 集

発 行 国士舘大学地理学会

会長 瀬戸 玲子

〒154 東京都世田谷区世田谷 4 - 28 - 1

国士舘大学地理学教室内

Tel 03(5481) 3245

印 刷 内外地図株式会社

〒101 東京都千代田区神田小川町 3 - 22

Tel 03(3291) 0338
